

平成27年度

ふくしま未来学 事業報告書

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

— 原子力災害からの地域再生をめざす「ふくしま未来学」の展開 —

平成27年度

ふくしま未来学 事業報告書

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

— 原子力災害からの地域再生をめざす「ふくしま未来学」の展開 —

地（知）の拠点整備事業 平成27年度 ふくしま未来学 事業報告書 目次

ごあいさつ

「ふくしまの未来」を若者の力で	福島大学学長 中 井 勝 己 ……	4
10年後の学生へ	ふくしま未来学推進室室長（副学長・教育担当） 神 子 博 昭 ……	4
ふくしまの未来を担う人材の育成に期待	福島県知事 内 堀 雅 雄 ……	5
持続可能な社会づくりのための人材育成を	浪江町長 馬 場 有 ……	5

はじめに

原子力災害からの地域再生をめざす「ふくしま未来学」の展開について ……	6
-------------------------------------	---

事業実績

平成27年度「ふくしま未来学」事業実績 ……	9
平成27年度「ふくしま未来学」事業活動一覧 ……	11

成果報告／教育

教育① 「ふくしま未来学」カリキュラム構築 ……	14
教育② 「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(1) ふくしま未来学入門 ……	20
「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(2) グローバル災害論 ……	26
「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(3) むらの大学 ……	27
教育③ 「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(1) ……	37
教育と文化による地域支援モデル「復興教材づくり論」	
「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(2) ……	38
コミュニティ共創モデル「社会計画論」	
「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(3) ……	39
地域経済活性化モデル「Fukushima Workshop (Japan Study Program Ⅲ)」	
「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(4) ……	40
地域産業・地域環境支援モデル「地域計画論」	
教育④ 教育FD 実施報告 ……	41
「福島大学発アクティブ・ラーニング～COC科目の実質化にむけて～」	
【小括】 教育事業の課題と今後 ……	45

成果報告／研究

平成27年度地域志向教育研究経費 実施報告	48
平成27年度地域志向教育研究経費 採択一覧	49
地域志向教育研究経費 成果報告(1) 「学生が考える」地域交通計画のデザイン	51
地域志向教育研究経費 成果報告(2) 原発事故に伴う避難指示区域の歴史文化遺産の保全と継承	52
地域志向教育研究経費 成果報告(3) 地域問題+ものづくり=福島のみらい ～工学的視点から取り組む地域問題～	53
地域再生の先進事例調査 実施報告	54
【小括】 研究事業の課題と今後	56

成果報告／社会貢献

社会貢献① 「みらいバス」実施報告	58
社会貢献② ふくしま未来学出前講座 実施報告	69
社会貢献③ 高校生向けシンポジウム 実施報告	72
【小括】 社会貢献事業の課題と今後	74

連携自治体との取り組み

ふくしま未来学 連携自治体担当者会議	76
連携自治体との協力事業 実施報告(1) 広野町	78
連携自治体との協力事業 実施報告(2) 南相馬市	79
連携自治体との協力事業 実施報告(3) 福島市	81

参考資料

平成27年度 ふくしま未来学推進室会議 実施報告・議事要録	84
平成27年度「ふくしま未来学」に関する報道一覧	93
平成27年度「ふくしま未来学」関係者一覧	94



「ふくしまの未来」を若者の力で

福島大学学長 中井 勝己

福島大学は、平成25年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」において「原子力災害からの地域再生をめざす『ふくしま未来学』の展開」の採択を受けました。今日の大学教育では、フィールドワークなどにより学生が自主的に学ぶアクティブ・ラーニング（能動的学習）が重視されています。「ふくしま未来学」は、東日本大震災と福島原発事故の被災地の現場に出向き、課題を理解しその解決を見出すという、地域課題への実践的な学びを通し、地域再生に取り組む人材の育成をめざしています。

被災から5年が過ぎ風化が進行する中、福島県では、いまだに県民約10万人が県内外に避難生活を余儀なくされています。被災地域の教育・医療・福祉の弱体化、放射能汚染による農業・漁業・林業などのダメージ、風評被害など、福島復興に向けての課題が山積しています。

このような人口減少、産業の衰退、教育・医療・福祉の弱体化、集落の消滅は、日本が直面する課題でもあり、その意味で、「ふくしま未来学」は、日本の21世紀課題の解決策を探る大学教育プログラムであるということもできるでしょう。

若者の地方や地域への定着が国の「地方創生」政策の中で唱われていますが、福島大学は地域の拠点大学として「ふくしま未来学」の一層の充実を図っていきます。



10年後の学生へ

ふくしま未来学推進室室長 神子 博昭
(副学長・教育担当)

2011年3月11日からまもなく満5年を迎えます。震災の衝撃は大学の存在意義に関しても深刻な問いを投げかけました。劇的に変化する現実をまえに、大学の教育、研究はどうあるべきか。変貌する事態をまえに、疑問を抱き、問いを立て、課題を設定し、解決策を提案する、そうしたことが強く教育に求められるようになりました。教室や研究室から外へ出て、フィールドワークに向かい、あるいは学内でも「アクティブ・ラーニング」ということが言い立てられる。これは十分理由のあることでしょう。

そうではあるのですが、また違和感を抱く自分がいるのも事実です。問題はなにか、解決策はどれか、成果はあるか、という小さな循環のなかをぐるぐる巡っている光景が浮かびます。知識や出会い、驚きや疑問などは、一人ひとりの心の奥深くに、いわば魂に沈み込むものではないでしょうか。自分でも知らぬうちに、無明のなかに自生し、成長し、変成していくものではないでしょうか。——オタンチンめ、そんな考え方が大学の教育や研究を現実遊離のものとした元凶ではないか。そんな嘲りの声が聞こえてきます。

それでも「ふくしま未来学」を受講し、やがて大学から遠く離れて行く学生に、こう問いかけることのできる授業を提供できれば、と思います。10年後、20年後に、きみたちの心にはまだ、ここ福島で学んだことが生き続けているだろうか、と。



ふくしまの未来を担う人材の育成に期待

福島県知事 内堀 雅雄

本事業は、原子力災害からの地域再生をめざすものであり、本年度で3年目を迎えました。この間、地域実践学習「むらの大学」やふくしまを知るスタディツアー「みらいバス」などにおいて、着実に実績を重ねてきております。

県におきましては、昨年12月に策定した「ふくしま創生総合戦略～ふくしま7つの挑戦～」において、県内高等教育機関と連携し、地域産業を担う人材を育成・確保することとしております。ふるさとふくしまに誇りを持ち、困難な課題に果敢に挑戦し、明日のふくしまを担う人材の育成は、震災からの復興の推進と地方創生に寄与するものと期待しております。



持続可能な社会づくりのための人材育成を

浪江町長 馬場 有

震災から5年、原子力災害の避難区域は、一部でようやく復旧の正念場を迎え、次の本格復興期に備える段階に入ってきております。その復興まちづくりにおいては、どのような計画であっても、地域の歴史を踏まえたうえでの新しく柔軟な発想、そして百年の大計を考えるという観点が欠かせません。百年先を見据えた持続可能な地域づくりには、人材こそ最も大切な資源と痛感しております。

双葉郡および福島県の復興再生における福島大学の実学重視の姿勢に対し、あらためて敬意を表すとともに、「ふくしま未来学」を学んだ若者たちが将来、福島復興、そして日本、世界の発展に貢献されることをご期待申し上げます。

原子力災害からの地域再生をめざす「ふくしま未来学」の展開について

「ふくしま未来学」の展開で目指すこと

「ふくしま未来学」は、原子力災害からの経験をふまえ、地域課題を実践的に学び、未来を創造できる人材の輩出と原子力災害からの地域再生をめざしている。学類の枠を超えて全学生に開かれた特修プログラム「ふくしま未来学」を体系化し、被災地復興や地域再生に寄与する実践的教育を展開する。また、「教育」「研究」「社会貢献」を大きな柱とし、全学的に地域を志向した事業を進めていく。

教 育 「ふくしま未来学」による未来を創造できる人材育成

東日本大震災および原子力災害からの地域再生をめざし、特修プログラム「ふくしま未来学」の体系化によるカリキュラム改革を行う。具体的には、原子力災害による影響や地域再生にむけた課題や取り組みなどの基礎知識を習得する「コア科目」、4つのモデルに基づき地域が直面する課題や解決にむけたアプローチを専門的に学ぶ「モデル選択科目」を開講する。それにより、学生が地域課題を実践的に学習し、「ふくしま未来学」における5つの力を修得できる環境を構築する。課題解決型の思考を養う「ふくしま未来学入門」や住民との交流から地域課題を学ぶ「むらの大学」をはじめとして、学生が地域に対する関心を高め、実践的に学習し、未来を創造できる人材に養成する。

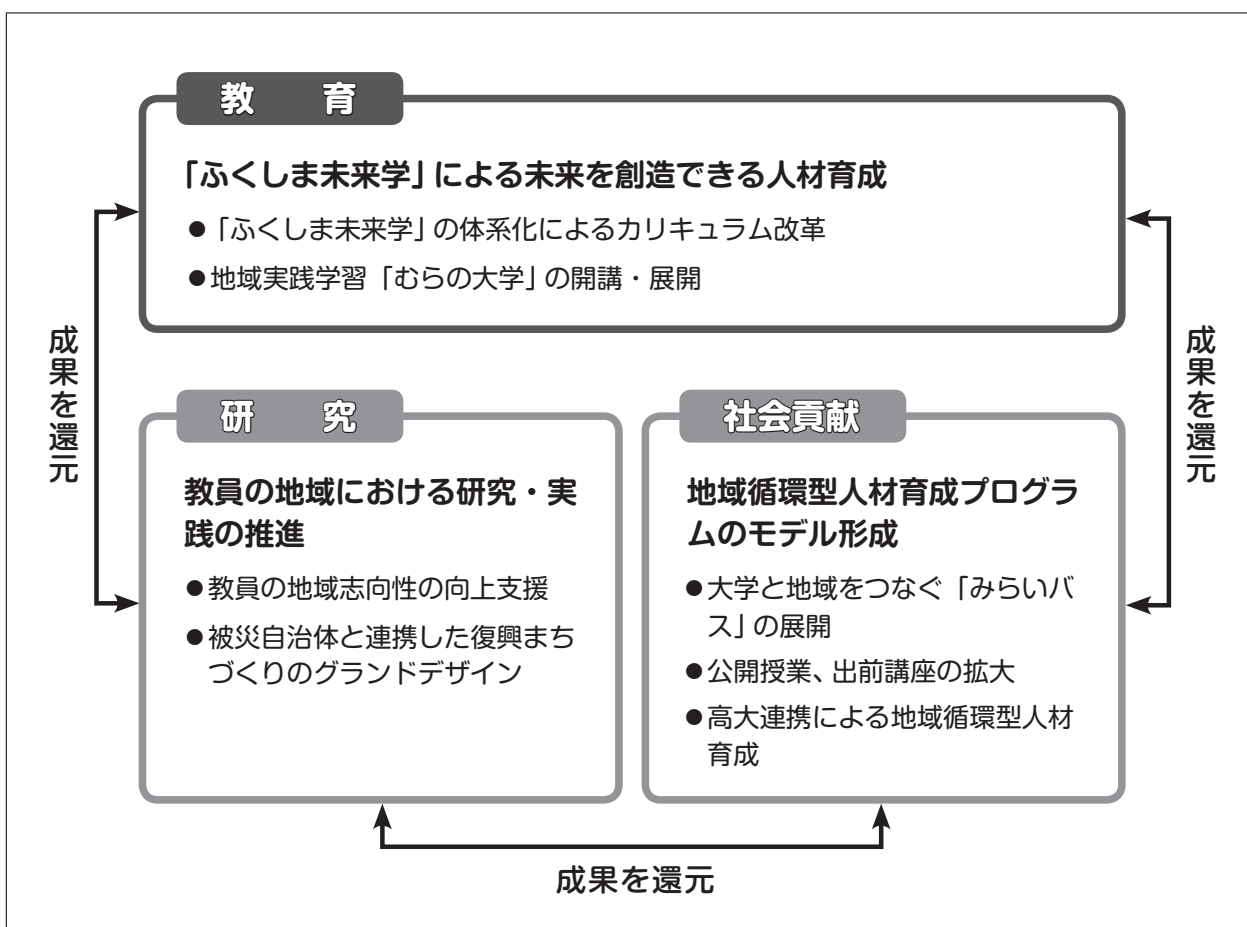
研 究 地域における研究・実践の推進

東日本大震災および原子力災害からの地域再生に向け、研究面から推進する。より一層、地域における地域志向性を高めるためには、教員による地域での研究活動の展開が不可欠である。そこで「地域志向教育研究経費」を設置し、地域志向性の高い研究を行う教員に対して研究費を配分する。地域における研究・実践を推進する中で、自治体や住民と協働した教育研究を支援していく。

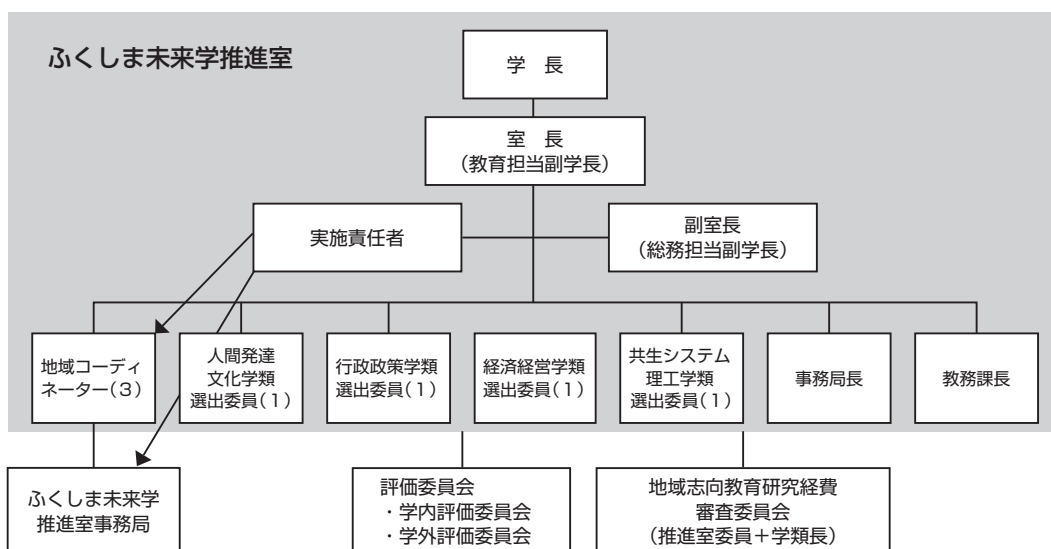
社会貢献 地域循環型人材育成のモデル形成

原子力災害により影響を受けた地域をはじめとする自治体と連携し、地域再生・活性化を推進する。具体的には、学生だけではなく教職員も含めて全学的に、地域の現状を学び理解するスタディツアー「みらいバス」の展開をおおして、住民の交流促進と地域の活性化に寄与することをめざす。また、地域住民へ広く大学を開放するため、公開授業や出前講座を拡充する。さらには、双葉郡をはじめとする自治体と連携し、初等教育から高等教育まで連携した地域循環型人材育成に取り組む。

■ 事業概要図



■ 運営組織図



■ 連携自治体

福島県内12自治体と連携し、事業の展開を図ります。



■ 「ふくしま未来学」をとおして学生が身につける5つの力

「ふくしま未来学」の展開を通じて、5つの力を養成する。

地域課題を発見する力	地域にあらわれる多様な課題を発見する力
地域を分析する力	科学的にかつ総合的に地域課題を理解する力
地域を興す力	地域課題のミッションを明らかにし、自ら主体的に解決するために行動する力
地域をつなげる力	地域課題を解決するために、多様なセクターと協働する力
地域を伝える力	地域課題の社会的解決に向けて、現状や地域の主体的な取り組みを外部に発信する力



平成27年度 「ふくしま未来学」 事業実績

① 教育の成果

4つのモデルに基づき地域が直面する課題や解決にむけたアプローチを専門的に学ぶ「モデル選択科目」を98科目開講した。「ふくしま未来学（COC）」の認定対象者である、平成26年度以降に入学した学生のうち60%がモデル選択科目を受講した。

さらに、今年度より3つの事業を新たに展開した。ひとつは、課題解決型の思考を養う科目「ふくしま未来学入門」の開講である。362名と多くの受講者が、課題解決にむけた物の見方や考え方を習得した。2つめは、「ふくしま未来学」科目における授業内容の充実をむけて意見交換を行う「コア科目担当者会議」の実施である。3つめは、「ふくしま未来学」科目におけるバス貸切と講師謝金補助制度の創設である。これらにより、「ふくしま未来学」のさらなる充実と基盤づくりに取りかかることができた。

また、2年目となる地域実践学習「むらの大学」においては、昨年度に比べ3倍の受講者数であったことに加え、地域協働教育プログラム「みらいバス」の実施により、全学的により多くの学生が地域課題を実践的に学習する環境をつくることができた。
(詳細：14ページ～)

② 研究の成果

平成25年から始まった地域志向教育研究経費の実施に関して、今年度は新たな取り組みとして、本経費に応募を希望する教員を対象に説明会を3回行った。説明会は、本経費の目的や理解を深めてもらうために実施したことで、予定していた申請数とほぼ同じで申請があった。また、今年度は双葉郡の自治体で研究を行う教員に対して、課題解決型の協働研究課題公募区分を新たに導入したことで、研究面での連携自治体との新たなつながりを作ることができた。

2か所の先進事例の調査・視察では、どちらも本事業の取り組みにつながった。宮城県石巻市で、地域再生の取り組みを行うNPO団体等にヒアリングを行ったことで、交流人口の拡大地域資源を活用して教育を通じたまちづくりを行う取り組みを広く知ってもらうために、「ふくしま未来学入門」の授業で、団体の代表に講師としてご講義いただいた。

もう一つは、本学と同様にCOC事業を採択されている岩手大学で、アクティブ・ラーニングの取り組み事例や課題などについて意見交換を行ったことから、本事業の教育FDの際に、室長をお招きし、岩手大学が行う被災地学修（アクティブ・ラーニング）についてご報告いただいた。
(詳細：48ページ～)

③ 社会貢献の成果

今年度より、3つの事業を新たに展開した。ひとつは、本学の学生と教職員を対象にした地域の現状を学び理解するスタディツアー「みらいバス」である。連携自治体との協働により、住民との交流を重視したプログラムとなり、地域の活性化に寄与することができた。2つめに、「公開授業」である。今年度より新規開講をした「ふくしま未来学入門」を一般公開し、個人や各団体における地域再生に向けた取り組みにつながる学びを提供することができた。

3つめに、「出前講座」である。仮設住宅や復興住宅で支援活動を行うコミュニティ交流員、生活支援相談員、復興支援員などを対象に全5回の出前講座を開講し、支援者間のネットワークや連携をすすめるための支援体制の構築をすることができた。(詳細：58ページ～)

④ 全体の成果

今年度は昨年度の取り組みが基盤となり、継続事業の充実化や、新規事業を実施することができた。連携自治体の実態把握や連携自治体の担当者と意見交換を行う機会を増やし、本事業に関する課題を共有したことで、連携を強化することができた。完成年度に向けて「ふくしま未来学」の体系が整いつつある。

また、多様な事業展開と学内外にむけた広い周知により、「ふくしま未来学」における取り組みを多くの地域の方々に知っていただくことができた。

総括 ふくしま未来学実施責任者 丹波 史紀(行政政策学類 准教授)

本学におけるCOC事業「ふくしま未来学」は、今年度で3年目の「折り返し地点」にある。

本学では、原子力災害からの経験を踏まえ、地域課題を実践的に学び、未来を創造できる人材の輩出と原子力災害からの地域再生をめざすことを目的とし、福島県・福島市・伊達市・南相馬市・双葉郡8町村と連携しながら、「教育」・「研究」・「社会貢献」を中心とした事業展開を行ってきた。特に、教育面において、「ふくしま未来学」と銘打ち、平成26年度新入生から教育プログラムの展開を図る全学的な教育プログラムである。学生は、入学以降、コア科目(4単位以上)、およびモデル選択科目(16単位以上)の科目を履修し、それぞれの学士号とは別に、「ふくしま未来学」として修了する副専攻の教育体系を築いた。

今年度は、こうした「ふくしま未来学」と題した指定科目の教育実施2年目にあたる。特にコア科目の中で、地域実践学習の一つとして新設した授業「むらの大学」も2年目にあたり、全学から約60名の学生が受講した。学生たちは、それぞれ南相馬市・川内村において2週間の現地での実践学習を行った。このようにCOC事業である教育プログラムとして着実に前進をしてきているのが本年度の特徴であったと言えよう。さらに、学生たちへはCOC事業における「ふくしま未来学」の指定科目を受講する際に、シラバスにおいてこの教育プログラムで身につけるべき5つのコンピテンシーのうち、その科目がどのような力をつけることができるのかを明示し、学生の受講選択の目安とする準備を進めた。また、アクティブ・ラーニングの評価指標の開発として、「むらの大学」の授業において、ルーブリックなどを活用した学生の教育効果を指標化する試みも行った。

「教育」だけでなく、「研究」や「社会貢献」においても、COC事業の着実な前進とさらなる展開を行った。「研究」においては、地域志向教育研究経費の公募を広く学内にすることによって、教員個人あるいは複数教員によるプロジェクトの研究活動の展開を図った。特に連携自治体との協働事業を推進する上で、「プロジェクト型」において「課題指定型プロジェクト」を新設し、双葉郡などとの共同研究の公募を行った。さらに、学生の主体的な学習や地域実践を推進する上で、教員の指導の下、プロジェクト学習をすすめるための「地域振興推進費」は2年目となり、昨年より申請が増えた。この結果、18のプロジェクトが採択された。

「社会貢献」では、正規科目以外に学生や教職員のサービ斯拉ーニングを推進することをねらいとし、1 dayなどによるスタディツアーとして、「みらいバス」を新たに実施した。これにより県内10市町村において全7回の「みらいバス」の実施をし、学生・教職員約100名(のべ)の参加があった。また、連携自治体や各種関係団体と協力し、震災以降県内で活動する生活支援相談員や復興支援員などを対象にした「出前講座」も実施した。

このように、事業の中間段階にふさわしく、事業体制のさらなる充実を図ることができ、新たな課題にも挑戦することができた一年であった。学生の教育を地域全体で担っていくためにも、来年度は地域実践学習「むらの大学」において、大学だけでなく、自治体・NPO・地域住民が参画して学生の教育プログラムを検討する「協議会」の設置を各地域に行うことを検討しており、今後のCOC事業のさらなる充実をめざしていき、「地域で学び、地域とともに成長する」教育をめざしていきたい。

平成27年度「ふくしま未来学」事業活動一覧

月	主な実施内容	
4	教 育	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふくしま未来学」モデル選択科目開講 ・「ふくしま未来学」概要説明【平成27年度新入生ガイダンス】（4月6～8日） ・「むらの大学」説明会（4月9日）、「むらの大学」ガイダンス（4月10日） ・第1回コア科目担当者会議（4月24日） ・COC科目向け バス貸し切り、講師謝金制度開始 ・「むらの大学」における指標開発開始
	研 究	<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度地域志向教育研究経費 募集説明会（4月22、24、27日） ・平成27年度地域志向教育研究経費募集開始（4月22～5月15日）
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回みらいバス「川内村のはるまつり」（川内村）（4月29日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・「地（知）の拠点整備事業」アンケート実施（4月20～5月11日）【全学類生、全教員、全職員、連携自治体向け】 ・第26回ふくしま未来学推進室会議（4月24日）
5	教 育	<ul style="list-style-type: none"> ・「むらの大学：川内村スタディツアー」実施（5月9日） ・「むらの大学：南相馬スタディツアー」実施（5月30日）
	研 究	<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度地域志向教育研究経費採択審査会（5月26日）
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回みらいバス「かつらお村民運動会」（葛尾村）（5月31日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・むらの大学：川内村にて田植え体験（5月10日） ・第1回連携自治体担当者会議（5月11日） ・第27回ふくしま未来学推進室会議（5月21日） ・「COCニュースレター川内村特集号」発行 ・むらの大学：川内小学校保育園合同運動会参加（5月23日） ・むらの大学：南相馬市にて田植え体験（5月31日）
6	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・川内村いわなの郷20周年第一弾感謝祭 ボランティア（6月6日）
	研 究	<ul style="list-style-type: none"> ・地域再生の先進事例調査視察と意見交換 ー石巻市体験型複合施設「MORIUMIUS」（6月29～30日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・「みなみそうま復興大学」開所記念シンポジウム参加（6月20日） ・第28回ふくしま未来学推進室会議（6月25日） ・「COCニュースレター Vol.6」発行
7	研 究	<ul style="list-style-type: none"> ・地域再生の先進事例調査視察と意見交換ー三陸鉄道株式会社、岩手大学のCOC事業（7月6～7日）
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回みらいバス「五感で楽しむ東和の夏！」（二本松市）（7月4日） ・ならは応援団「花とみどりプロジェクト」花植え参加（7月8日） ・第4回みらいバス「相馬野馬追」（南相馬市）（7月25日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・むらの大学：川内村高田島フェスタに参加（7月8日） ・むらの大学：川内村菜の花種取り手伝い（7月19日） ・ずっと福島市応援プロジェクトに協力（7月～9月のうち5回） ・第29回ふくしま未来学推進室会議（7月31日）
8	教 育	<ul style="list-style-type: none"> ・「むらの大学：南相馬市」フィールドワーク実施（8月21～9月3日）
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・広野町スタディツアーの実施（8月18日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスにて「ふくしま未来学」概要説明ブースの設置、高校生向けシンポジウムの実施（8月9日）
9	教 育	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふくしま未来学入門」一般受講生募集開始（9月1～18日） ・「むらの大学：川内村」フィールドワーク実施（9月4～17日） ・第2回コア科目担当者会議（9月29日）
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・「広野町国際フォーラム」にて発表（9月19日）
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・むらの大学：南相馬市小高区「芋こじ会」参加（9月26日）

10	教 育	・「ふくしま未来学入門」開講（10月5日）
	社会貢献	・第5回みらいバス「高齢化社会における地域再生を学ぶ」（金山町）（10月12日） ・第1回出前講座－いのちとくらしのデザイン塾－（10月20日） ・第2回出前講座－いのちとくらしのデザイン塾－（10月27日） ・小高区復興文化祭ボランティア（10月17日）
	そ の 他	・むらの大学：南相馬市稲刈り体験（10月4日） ・第30回ふくしま未来学推進室会議（10月8日） ・むらの大学：そばフェスタ in かわうちの手伝い（10月17～18日） ・むらの大学：南相馬市小高区「芋こじ会」参加（10月24日）
11	教 育	・教育FD「福島大学発アクティブ・ラーニング」実施（11月25日）
	社会貢献	・第3回出前講座－いのちとくらしのデザイン塾－（11月11日） ・第4回出前講座－いのちとくらしのデザイン塾－（11月24日） ・ならは応援団「花とみどりプロジェクト」花植え参加（11月19日）
	そ の 他	・むらの大学：南相馬市「あきいち」に出展（11月3日） ・第31回ふくしま未来学推進室会議（11月27日） ・むらの大学：南相馬市小高区「芋こじ会」参加、イルミネーション飾りつけ手伝い（11月28日） ・むらの大学：川内村いわなの郷20周年感謝祭（11月29日）
12	教 育	・「むらの大学：南相馬市フィールドワーク現地報告会」（12月5日） ・「むらの大学：川内村フィールドワーク現地報告会」（12月13日）
	社会貢献	・第5回出前講座－いのちとくらしのデザイン塾－（12月8日）
	そ の 他	・むらの大学：南相馬小高区「芋こじ会」参加（12月19日） ・むらの大学：南相馬市餅つきに参加（12月20日） ・「COCニュースレター vol.7」発行
1	社会貢献	・第6回みらいバス「現状と復興に向けた歩みを知る」（浪江町・富岡町・楡葉町）（1月23～24日）
	そ の 他	・第32回ふくしま未来学推進室会議（1月14日）
2	そ の 他	・第2回連携自治体担当者会議（2月5日） ・第33回ふくしま未来学推進室会議（2月18日）
	3	研 究
	社会貢献	・第7回みらいバス ひろの防災緑地 植樹祭（広野町）（3月5日）
	そ の 他	・「ふくしま未来学（平成27年度）」学内評価委員会実施（3月3日） ・むらの大学：川内村と富岡町仮設住宅における「3.11追悼イベント」に参加（3月11日） ・むらの大学：川内村「炭焼き体験」参加（3月15日） ・平成27年度ふくしま未来学 学外評価委員会実施（3月17日） ・むらの大学：南相馬市「真野川漁港開所式」参加（3月21日） ・むらの大学：南相馬市「桑の剪定作業」お手伝い（3月26日） ・第34回ふくしま未来学推進室会議（3月17日） ・平成27年度ふくしま未来学事業報告書 発行 ・「COCニュースレター vol.8」発行



成果報告／教育



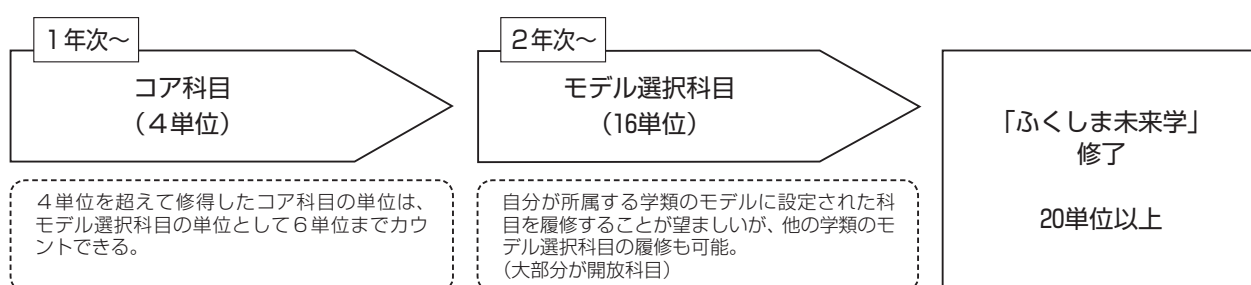
- ふくしま未来学カリキュラム構築
- ふくしま未来学コア科目授業紹介
- ふくしま未来学モデル選択科目授業紹介
- 教育FD 実施報告
- 【小括】 教育事業の課題と今後

教育①「ふくしま未来学」カリキュラム構築

「ふくしま未来学」の カリキュラムについて

「ふくしま未来学」の全体像

「ふくしま未来学」は、原子力災害からの経験を踏まえ、地域課題を実践的に学び、未来を創造できる人材の輩出と原子力災害からの地域再生をめざすための特修プログラムである。



●「ふくしま未来学」のポリシー

- ▶▶ 1年次から4年次まで複数年にわたり、継続的に地域（コミュニティ）に関わることにより、その地域が抱える社会的課題を理解すると共に、地域住民が実践的に取り組む地域づくりに参画することができる。
- ▶▶ 継続的な関わりを通して地域の変化や発展を追うことができ、学生自らの学習・成長と地域の発展を結びつけることができる。
- ▶▶ 東日本大震災と原発事故の経験を踏まえ、「ふくしま」の持つ歴史的でグローバルな文脈を理解し、さらに具体的な地域的課題を分析し、かつ課題解決のミッションを発見することをめざす。

●モデル選択科目のカリキュラムポリシー

本プログラムのモデル選択科目は、大学の4つの学類系をもとに履修モデルを指定している。各カリキュラムポリシーに基づき、科目の体系化および授業内容の充実を図っている。

モデル名称	カリキュラムポリシー
教育と文化による地域支援モデル (人間発達文化学類系科目)	人間や文化に主体的にかかわり、地域課題を解決し、新たな文化を創造することができる。また、地域が求める人材育成に寄与することができる。
コミュニティ共創モデル (行政政策学類系科目)	災害前から地域社会が抱えていた人口減少、少子高齢化、過疎・中山間地域など、社会構造の変化を具体的な地域において理解し、分析することができる。さまざまな地域課題を、多様なセクターの協働によって、主体的に解決する能力を身につけることができる。
地域経済活性化モデル (経済経営学類系科目)	地域の復興と活性化に関する課題を解決する為の様々な知見や方法を経済と経営の分野から学び、それらを自ら活用して課題解決を図るとともに、地域と自治体の資源を活用する力を身につける。
地域産業・地域環境支援モデル (共生システム理工学類系科目)	地域社会が直面している産業分野における諸問題や、環境科学分野における諸問題を科学的に理解し、分析することができる。今後の地域の発展に対しての課題を見つけるとともに、解決するための力を身につける。

今年度の「ふくしま未来学」受講結果

平成26年度以降入学の「ふくしま未来学 (COC)」認定対象者において、今年度のコア科目の受講者数(実数)は839人(うち1年次700人)、モデル選択科目の受講者数は1,209人であった。

今年度より「ふくしま未来学入門」「小さな自治体論」「グローバル災害論」を新規開講したことにより、1年次のコア科目受講者数が昨年度より増えた(昨年度1年次コア科目受講者数:556人)。

以下は、学類別毎のコア科目及びモデル選択科目の受講率を示したものである。

	人間発達学類	行政政策学類	経済経営学類	共生システム理工学類	現代教養コース	全 体
COC認定対象 1、2年在籍数	581人	441人	468人	376人	119人	1,985人
コア科目受講率	38%	63%	46%	32%	2%	42%
モデル選択科目 受講率	55%	99%	58%	34%	40%	60%

今年度の成果

(1) モデル選択科目の開講

今年度より、平成26年度以降入学の学生を対象として、98科目のモデル選択科目を開講し、特集プログラム「ふくしま未来学」の体系化によるカリキュラム改革の基盤づくりを行うことができた。

※「ふくしま未来学」指定科目一覧は、17ページを参照。

モデル名称	科目数
教育と文化による地域支援モデル(人間発達文化学類系科目)	26
コミュニティ共創モデル(行政政策学類系科目)	44
地域経済活性化モデル(経済経営学類系科目)	16
地域産業・地域環境支援モデル(共生システム理工学類系科目)	12

(2) 「ふくしま未来学」科目の充実に向けた新たな取り組みの実施

1) コア科目担当者会議の実施

コア科目の授業内容のさらなる充実にむけて、「コア科目担当者会議」を実施した。学期が始まる4月と9月に2回行い、各担当教員から授業内容と現在の学生の様子について共有をした。

会議では、大きく2つの課題が明らかになった。ひとつは、東日本大震災から約5年が経ち、震災における社会的経験を持つ学生が減少している現状において、学生にいかに関心を持って放射線物質の基礎知識を得ることや震災復興のあり方に関心を持ち、考えてもらうか。もうひとつは、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業において、自主的な学生とそうではない学生で取り組み方や学びに大きく差が開いていることである。学生の学びを深めるしかけをより一層高めていくためにも、今後も継続をして担当者会議を実施し、協議していく。

2) シラバスにコンピテンシーの記載

コア科目及びモデル選択科目全ての科目のシラバスに、「ふくしま未来学」の科目であることを明記し、学生が主体的に「ふくしま未来学」の科目を選択できるよう工夫をした。

さらに、次年度からは、コア科目のシラバスにおいて、「ふくしま未来学」における5つのコンピテンシーのうち学生がその授業でどの力を身につけることができるのかを明記することとした。

3) バス貸切・講師謝金補助制度の実施

「ふくしま未来学」科目の充実に向けた支援制度を2つ創設した。ひとつは、授業において地域での活動をより一層広げていくことを目的とした貸切バスの費用補助制度。もうひとつは、学生がより多面的な知見や技能を身につけることを目的に授業で地域住民をはじめとする幅広い講師を招く場合の講師謝金補助制度である。「ふくしま未来学」科目のうち、4つの科目においてこれらの制度が活用され、授業内容の充実をはかることができた。

(3) コア科目の公開授業の実施と検討

住民の学ぶ機会をつくることを目的に、コア科目の授業を「公開授業」として一般公開した。今年度は、新規開講した「ふくしま未来学入門」において一般受講者を募り、県内外の社会人12名が受講した。次年度からは、4つのコア科目を新たに公開授業として登録し、「ふくしま未来学入門」とあわせて計5つの科目を一般公開することとした。

〈平成28年度の「ふくしま未来学」科目の一般公開科目〉

- ふくしま未来学入門
- グローバル災害論
- 小さな自治体論
- 原子力災害と地域
- 水・土地の汚染と私たちの健康・生活

次年度に向けた課題

平成28年度のプログラム完成年度に向けて、引き続き、コア科目及びモデル選択科目の充実と地域志向性の向上をめざしていく。少しずつではあるが、地域志向教育研究経費による教育・研究活動の成果から「ふくしま未来学」の新規科目開設につながっていることから、次年度以降も教員への支援制度の拡充に取り組む。

また、コア科目受講者数は昨年度と比較し、増えているものの、学類毎にばらつきも見られる。したがって、学生や教員にむけた「ふくしま未来学」科目の周知徹底をはじめ、受講することでのメリットを学生に提示するなど、より多くの学生に「ふくしま未来学」科目を主体的に受講してもらうための工夫を行っていく。

平成28年度「ふくしま未来学」指定科目一覧表

コア科目：17科目、モデル選択科目：102科目（合計119科目）

※色付部分は、平成28年度より新たにCOC科目として指定された科目。

科目区分		授業科目名	履修年次	単位数
(選択必修) 4単位修得 コア科目	自己デザイン領域	キャリアモデル学習(行政政策学類は対象外。人間発達文化学類は「キャリアモデル学習Bのみ対象」)	2	2
	共通領域	(総)ふくしま未来学入門	1	2
		(総)NPO論	1	2
		(総)原子力災害と地域	1	2
		(総)災害復興支援学Ⅰ	1	2
		(総)災害復興支援学Ⅱ	1	2
		(総)ボランティア論	1	2
		(総)水・土地の汚染と私たちの健康・生活	1	2
		(総)むらの大学Ⅰ	1	2
		(総)むらの大学Ⅱ	1	2
		(総)むらの大学Ⅲ	2	2
		(総)むらの大学Ⅳ	2	2
		(総)小さな自治体論	1	2
		(総)グローバル災害論	1	2
		地域論Ⅰ	1	2
		地域論Ⅱ	1	2
	専門領域 (人文社会学群科目)	現代社会へのアプローチ	1	2
(選択) 16単位修得 モデル選択 科目	(人間発達文化学類系科目) 教育と文化による 地域支援モデル	未来創造教育論	1	2
		復興教材づくり論	2	2
		復興のための授業方法論	3	2
		特別支援教育と学校防災	1	2
		科学技術と環境の倫理学	1	2
		自然災害と人間	4	2
		気候環境と人間	2	2
		都市とまちづくりの地理学	2	2
		産業と経済、地域振興の地理学	2	2
		食糧生産と国土保全の地理学	2	2
		地域文化の総合研究	2	2
		現代社会とコミュニティ	1	2
		現代社会と地域計画*	1	2
		現代の地域経済	1	2
		食と健康	1	2
		住環境学	3	2
		現代アートマネジメント	1	2
		生涯スポーツ論*	1	2
		スポーツ政策論*	3	2
		スポーツ企画演習*	3	2
		映像メディア論	2	2
復興教育学	1	2		

〈選択〉
16単位修得
モデル選択
科目

(人間発達文化学類系科目) 教育と文化による 地域支援モデル	自然体験実習	1	2
	地域教育実践Ⅰ*	2	2
	地域教育実践Ⅱ*	2	2
	学校教育支援実習Ⅰ*	2	2
	学校教育支援実習Ⅱ*	2	2
(行政政策学類系科目) コミュニティ 共創モデル	環境法	3	2
	憲法(人権)Ⅰ	2	2
	民法総則	1	2
	民法(不法行為)	1	2
	民法(債権総論)	2	2
	民法(債権各論)	2	2
	刑法Ⅰ	2	2
	刑法Ⅱ	3	2
	行政法総論Ⅰ	2	2
	法社会学Ⅰ	2	2
	法社会学Ⅱ	2	2
	民事裁判法Ⅰ	3	2
	民事裁判法Ⅱ	3	2
	行政学Ⅰ	2	2
	行政学Ⅱ	2	2
	現代政治論Ⅰ*	1	2
	現代政治論Ⅱ*	1	2
	地方政治論Ⅱ	3	2
	公共政策論Ⅱ	2	2
	地方行政論	2	2
	社会福祉論	2	2
	地域福祉論	3	2
	社会計画論	2	2
	地域環境論	2	2
	情報社会論	3	2
	生活構造論Ⅰ	3	2
	生活構造論Ⅱ	3	2
	社会調査論	2	2
	社会構造論Ⅰ	2	2
	地域社会学	2	2
	比較地域文化論Ⅰ	2	2
	地域史Ⅰ	3	2
	地域史Ⅱ	3	2
	国際文化交流論	3	2
	社会福祉課題研究Ⅰ*	3	2
	社会福祉課題研究Ⅱ*	3	2
	古文書学実習*	3	4
	考古学実習*	3	4
	特殊講義(民事救済法Ⅰ)	2	2
	特殊講義(民事救済法Ⅱ)	2	2

(選択) 16単位修得 モデル選択 科目	(行政政策学類系科目) コミュニティ 共創モデル	演習Ⅰ*	3	2
		演習Ⅱ*	3	2
		演習Ⅲ*	4	2
		演習Ⅳ*	4	2
	(経済経営学類系科目) 地域経済 活性化モデル	都市経済学	3	2
		環境経済学	3	2
		特別演習 (Japan study program IV) (Comparative Study of Recycling System in the World)	2	2
		産業組織と規制の経済学	3	2
		政治経済学入門Ⅱ	1	2
		開発経済学	3	2
		労働経済	3	2
		農業経済論	3	2
		地域経済論Ⅰ	2	2
		地域経済論Ⅱ	3	2
		地域交通まちづくり政策論	3	2
		地方財政システム論	3	2
		地方財政政策論	3	2
		地域政策論	3	2
		中小企業経営論	2	2
		証券市場論	3	2
		財務諸表論Ⅱ	3	2
	特別演習 Fukushima Workshop (Japan Study ProgramⅢ)	1	2	
	専門演習*	2	2	
	(共生システム理工 学類系科目) 地域産業・ 地域環境支援 モデル	環境計画論	2	2
		地域計画概論	2	2
		地域計画論	3	2
		生活環境論	2	2
		水循環システム概論	2	2
		水循環システム	3	2
		流域水循環システム調査実習*	2	1
		産業構造論	2	2
		地域産業政策	3	2
		機能性材料概論	2	2
有機・高分子材料学		3	2	
知的財産権論		4	2	

(注意)

1. 平成26年度以降の入学生から、適用します。
2. 平成26年度入学生が、入学後に単位修得した科目が、後日、本プログラムの科目に設定された場合、遡及して本プログラムの単位として認定します。
3. 科目によっては、抽選登録を要する科目、受講調整が行われる科目等があるので注意してください。
4. *印のついた科目は、各学類系における所属学類の学生のみ受講できます。
5. 対象科目の中には、毎年開講しない科目(隔年開講科目等)もあります。開講の有無は、各学類の学習案内や時間割表で確認してください。
6. 演習Ⅰ～Ⅳまたは専門演習は、すべてが「ふくしま未来学」の対象ではありません。詳しくは、ふくしま未来学推進室事務局(教務課内)窓口にお問い合わせください。
7. モデル選択科目の中には、Ⅰ・Ⅱの両方を履修することで要卒に必要な単位が認定される科目もあるため、各学類の学習案内を確認してください。
8. 「ふくしま未来学」の演習Ⅰ～Ⅳまたは専門演習の担当教員は、学習案内の専門演習のページを参照してください。

教育②「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(1)

ふくしま未来学入門

藤本 典嗣 (共生システム理工学類 教授)
 小山 良太 (経済経営学類 教授)
 丹波 史紀 (行政政策学類 准教授)

授業のねらい

震災・原発事故以降、福島では、多くの問題が顕在化し、課題先進地域として地域課題の解決と再生が求められている。地域再生を進めるためには、地域の課題を的確にとらえ、既存の枠にとらわれず多様なセクターと協働する課題解決型の思考が必要不可欠となる。多彩な講師陣をお招きし、現在地域で実際に行われて

いる取り組みについて話を伺うことで、受講生の地域と関わるための素養を身につけ、課題解決型の思考を養うことをめざす。また、授業を通して「ふくしま未来学」におけるコア科目やモデル選択科目を選択する際の指針となることをめざし、その後の地域実践的学習への展開を期待する。

また、「地域に開かれた大学」として、受講を地域に広く呼びかけ一般に公開する。

概要(スケジュール)

	日程	テ ー マ	講 師
第1回	10月5日(月)	オリエンテーション「ふくしま未来学」とは ～東日本大震災と原子力災害は地域に何をもたらしたか～	担当教員
第2回	10月15日(木)	里山資本主義から考える福島の未来	株式会社日本総合研究所 主席研究員 株式会社日本政策投資銀行地域企画部 特任顧問 藻谷 浩介氏
第3回	10月19日(月)	メディアは何を伝えたか～ラジオと震災～	フリーアナウンサー 大和田 新氏
第4回	10月26日(月)	原発23kmでの医療支援・今現場で何が起きているか	東京大学医科学研究所研究員 坪倉 正治氏
第5回	11月2日(月)	あすびと福島(福島の明日を担う人材)をつくる	一般社団法人 福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会(現一般社団法人あすびと福島) 代表理事 半谷 栄寿氏
第6回	11月9日(月)	地域課題を発見する ～石巻市雄勝地方における学校再生の取り組み～	公益社団法人sweet treat 311 理事 油井 元太郎氏
第7回	11月16日(月)	東日本大震災における財団やNPO・NGOの取り組み	公益財団法人東日本大震災復興支援財団 専務理事 荒井 優氏
第8回	11月25日(水)	新しいエネルギーの地産地消モデル	会津電力株式会社 代表取締役副社長 山田 純氏
第9回	12月7日(月)	新たな価値創造 Suica ～社会インフラへの発展～	日本電設工業株式会社 相談役 井上 健氏
第10回	12月14日(月)	地域の公共財としての鉄道 ～三陸鉄道 復旧・復興の取り組み～	三陸鉄道株式会社 代表取締役社長 望月 正彦氏
第11回	1月18日(月)	地域のめぐみを活かしたこれからの街づくり	株式会社東芝 コミュニティ・ソリューション社事業開発センター地域エネルギー担当 小西 千晶氏
第12回	1月25日(月)	スペシャル・トークセッション	
第13回	2月1日(月)	まとめ	担当教員

※10月15日と11月25日はみなし月曜日

授業の成果

今年度からの新規開講科目であったが、362名と多くの学生が受講をした。毎回300名前後の学生が出席し、自ら講師に質問をするなど、学生の「ふくしま」に対する関心や復興に対する学ぶ意欲の高さをうかがうことができた。

また、本授業は公開講座として一般にも公開され、「地域復興ビジョンの実現に役立てたい」「帰村にむけた今後のヒントになる」等という動機から、県内各地より12名の申込みがあった。受講後には「実践を通して得たものを惜しみなく教えていただいた。チャレンジ

精神をもって、今置かれている立場で私にできることを考え、行動することを強く教えられた」といった感想があり、個人や各団体における地域再生に向けた取り組みの学びの機会となった。

課題と今後の展望

各講義で学ぶ事例を福島の課題や自身の取り組みとより関連づけて考えることができるような工夫を行っていく。具体的には、福島県内の講師をさらに多く交え、福島県の歴史的背景や現状を広く学ぶなど、より実践的な学びにつなげていきたいと考える。



第2回 10月15日「里山資本主義から考える福島の未来」

【講師】

株式会社日本総合研究所 主席研究員
株式会社日本政策投資銀行地域企画部 特任顧問
藻谷 浩介 氏

【内容】

人間がもつイメージは、実際の現実とは違うことを説明して下さったが、今の福島の現状ともつながると学生も理解したようだ。「自分の勝手に考えるイメージと実際の数字の違いに驚いた」「数字にしっかりと目を向けて事実を知ることが大切だと思った」などの声が受講生からも聞かれた。

また、6次産業や、木材を使った海外や日本の事例に、福島での可能性も感じる授業で新たな視点を学生

も得ることが出来た。事実を知ること・発信することの重要性、福島の可能性を感じた授業だった。



第3回 10月19日「メディアは何を伝えたか ～ラジオと震災～」

【講師】

フリーアナウンサー 大和田 新 氏

【内容】

福島県では震災関連死が今も増え続けていることを初めて知ったという学生も多かった。大和田氏がこれまでに取材を通して出逢った、亡くなられた方やそのご家族の話から、その2万という数字の陰にあるひとつひとつの悲しみ、その想いを今もこれからも抱きながら生きていく方がいることを改めて学生が認識する機会となった。

「今まで知ったつもりになっていただけで、何も分かっていなかったと思った」「忘れかけていたものを

思い出させていただいた」と言った声が聞かれ、震災をふまえ自分に何ができるのか、どう行動するのかを考えるきっかけとなった。



第4回 10月26日「原発23kmでの医療支援・今現場で何が起きているか」

【講師】 東京大学医科学研究所

研究員 坪倉 正治 氏

【内容】

放射線について知らないことが多かったという学生が大半で、「放射線の知識や福島の現状を自分の言葉で伝えられるように」という坪倉医師の言葉が強く響いたようだ。また、放射線による身体的影響だけではなく、原子力災害（放射線）の背景にある、避難、様々な分断、脳梗塞などの病気の発生、コミュニティの離散等の課題も理解できた。

受講生は、福島の事例はもちろん、その他について

も学び広い視野を持つことの必要性を感じたようだ。



第5回 11月2日「あすびと福島（福島の明日を担う人材）をつくる」

【講 師】

一般社団法人 あすびと福島

代表理事 半谷 栄寿 氏

【内 容】

自分のやりたいことで社会的な価値を生むブレない志を持つこと、小さくても実行していくことの大切さ、目的と手段の違い、相手が巻き込まれたいくなるような状況をつくることなど、学生の心に強く響いたようだ。学生生活の中で、自分のやりたいことは何か？何のためにやりたいのか？など自分の「志」を確認し、改めて考える機会となった。

受講生からは「復興という面だけでなく、これから

の未来を考えていく中で志を持って大学生生活を送っていかうと思った」という声も聞かれた。



第6回 11月9日「地域課題を発見する～石巻市雄勝地方における学校再生の取り組み～」

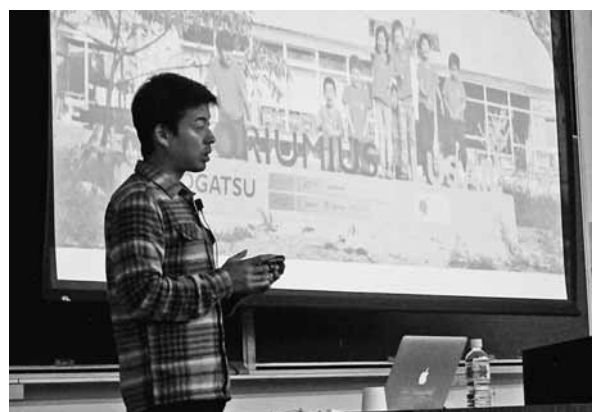
【講 師】 公益社団法人sweet treat 311

理事 油井元太郎 氏

【内 容】

『雄勝の森と海をベースにみんなで明日をつくる』そんな想いが込められた子どもたちのための複合型体験施設「MORIUMIUS」の設立と取り組みをとおして、持続可能な社会やその土地の持つ価値を活かしながら自然人も豊かになるという生き方など、「未来をつくる」ことを深く考える時間となった。油井氏の言葉と共にプロジェクターに映し出される雄勝の豊かな自然と、子どもたちが目をキラキラさせながら体験する様子に、多くの学生が「MORIUMIUS」のファンになり、「ボランティアをしたい」「インターンに行きたい」「地

域再生の貢献となるものをしたい」などとの声が多数聞かれ、これからの学生生活での取り組みにもつながる多くの刺激をいただいた授業となった。



第7回 11月16日「東日本大震災における財団やNPO・NGOの取り組み」

【講 師】 公益社団法人 東日本大震災復興財団

専務理事 荒井 優 氏

【内 容】

財団での東北復興の取り組みをはじめ、双葉郡の教育支援、新しい教育のあり方の実践など、さまざまな取り組みについて話を伺った。荒井氏の、大学時代から今日までの社会の課題解決にむけた取り組みの経験から導き出した「大学とは何か？」「幸せとは何か？」「NPOとは何か？」「復興とは何か？」といった問いは、学生たちも自分と向き合い考える時間となった。復興関係の仕事に就きたいと感じた学生も多くおり、一般の受講生からは、「どのような仕掛けをし、どう地域を

デザインするのか、これからを創る学生に期待したい」という声が聞かれた。



第8回 11月25日「新しいエネルギーの地産地消モデル」

【講師】 会津電力株式会社

代表取締役副社長 山田 純氏

【内容】

原子力に依存しない安全で持続可能な社会作りと、会津地域のエネルギー自立を目指し、小規模分散型の太陽光発電事業などに取り組んでいる会津電力。発電やお金の流れなどのわかりやすい説明は、学生が身近な電気や電力についてより関心を深め、原発事故後の私たちの生活について改めて考え直す時間となった。学生からは、今回の講義をとおして「原発がなくても上手にやっていく方法や、新しいサービス・商品をあえて日本ではなく海外で売りだそうとしていると知り、

新しい考え方を学ぶことができた」といった声が多く聞かれた。



第9回 12月7日「新たな価値創造Suica ～社会インフラへの発展～」

【講師】

日本電設工業株式会社 相談役 井上 健氏

【内容】

「Suica」が“社会インフラ”となるまでの16年間の挑戦についてお話を伺った。

数多くの困難に何度も打ち勝ち、さらなるSuicaの発展と他の新規事業開発に向けて取り組んでいる井上氏の話から、新しいものをつくる上で「なぜ、それをやるのか？」という基本理念に立つことが何よりも大事であるという考え方を学ぶ時間となった。

学生からは、「新しいものを創造することはたくさん問題点を克服する作業だと学んだ」「利益を追求するだけでなく社会に役立つという企業の可能性につい

て考えさせられた」などの声があり、顧客のニーズ（地域課題）に対して社会的価値を生み出していくことのおもしろさを感じていたようだ。



第10回 12月14日 地域の公共財としての鉄道 ～三陸鉄道 復旧・復興の取り組み～

【講師】 三陸鉄道株式会社

代表取締役社長 望月 正彦氏

【内容】

赤字経営の中、東日本大震災が襲い、線路を失う等大きなダメージを受けた三陸鉄道。その中で「鉄道が廃止されて栄えた町はない」「住民の生活の足を守る」という強い意志を持ち、復旧・復興に取り組んでいる。受講生からは、「望月社長の決断力と行動力で住民の鉄道への信頼が高まったと思う」「新しい発想の取り組みばかりで驚いた」「三陸鉄道の取り組みを福島でも活かしていけないか」という声があった。様々な企業との連携により、人や収入を得るしくみをつくり、ムー

ブメントを興している三陸鉄道の取り組みから多くのことを学ぶ時間となった。



第11回 1月18日「地域のめぐみを活かしたこれからの街づくり」

【講師】

株式会社東芝

地域・ホームソリューション部 地域エネルギー担当

参事 小西 千晶氏

【内容】

地域にある太陽や森林のエネルギーを地域で使うため、小西氏は企業の一員として行政や大学、各地域の関係者と協働したプロジェクトを行っている。

企業の社会貢献として、エネルギーの有効活用の研究や、地域の方と一緒に問題を解決するなど、企業がどのような取り組みを行い、それがどう地域に根付いているのかを初めて知る機会となった。

地域のめぐみを利用した東北での事例や、それに関

わる様々な職種の人たちが一人ひとり自分の役割を果たし、みんなで協力しあうことで実現できるという話に、自分自身におきかえて考えた学生も多かった。



第12回 1月25日「スペシャル・トークセッション ～ふくしまの課題解決にむけた若者の実践～」

【講師】

〈講演〉元内閣府大臣政務官・復興大臣政務官

衆議院議員 亀岡 偉民氏

〈パネルディスカッション〉

・株式会社小高ワーカーズベース

代表取締役 和田 智行氏

・株式会社 concept-village

代表取締役 馬場 大治氏

・福島大学 行政政策学類 2年

「むらの大学」受講生 木村 元哉氏

・福島大学 経済経営学類 3年

災害ボランティアセンター 加藤実可子氏

【内容】

震災直後から故郷福島の再生や復興のために活動を行ってこられた亀岡氏からは、復興にむけて多様な視点を持って挑戦していくことが必要だと、未来をつくる若者へむけて力強いメッセージをいただいた。

パネルディスカッションでは、南相馬市の小高ワー

カーズベース代表の和田氏から、小高は現代日本最後のフロンティアであるとして、雇用創出と人材育成のフィールドを整備していくことの必要性が語られた。concept-village代表の馬場氏は、福島生産者が抱える課題を解決するには、商品開発や消費プロセスの構造を根本的に変えていく必要があると語られた。

さらに福島大学の学生である、「むらの大学」受講生の木村氏からは、若者の役割は世代と世代をつなぐ接着剤になれることだとし、また、仮設住宅において、「いるだけ支援」に取り組む加藤氏からは、話を聞く・そばに居るといふ小さなことでも役に立てることがあると語られ、「学生だからできる役割」を考えるきっかけとなった。

今回の講義では、さまざまな立場から復興への見方や考え方を何うことができ、地域に関わってみたい、チャレンジしてみたいと意気込む受講生も多かった。受講生は小さなことからでも、できることから始め、変化と行動の積み重ねが大事であることを学んだ時間となった。



教育②「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(2)

グローバル災害論

佐野 孝治(経済経営学類 教授) 他11名

授業のねらい

世界では大規模災害が毎年のように発生し、経済的損失だけでなく、人的な被害がきわめて大きい。この授業は、第一に、世界の大規模災害についての基本的な知識を身に付けて、それらの特徴を正確に理解できるようになること、第二に、復興政策や復興戦略について、グローバルとローカルの視点で評価できるようになることを目標としている。それにより、東日本大震災・原発事故からの復興を担える人材を育てていくことを意図している。

授業内容

日本だけでなく、世界にも目を向ければ、地震、台風、津波など大規模災害が毎年のように発生している。こ



れらの大規模災害からの復興に当たっては、ローカルな視点だけでなく、グローバルな視点で、復興の経験を共有化し、比較分析することが重要である。

したがって、授業では、第一部で、東日本大震災からの復興プロセスに焦点を当て、第二部では、中国、タイ、アメリカ、ペラルーシ共和国、ハイチ、インドネシア、ソロモン諸島などの被害状況と復興プロセスに焦点を当てた。講師は、福島大学の各学類、日本政策投資銀行、新潟大学、JICAなどからなる「福島大学国際災害復興学研究チーム」が中心となって行った。

授業の成果

学生たちの関心は高く、熱心に受講してくれた。アンケートでは、「様々な海外の災害の事例から、防災や復興について考えることができた」、「様々なスピーカーの方たちの話を聞き、非常に実になるものだった。他の未来学の講義にも活かせるものだった」、「日本との比較ができて面白い」などのコメントが寄せられ、総合満足度も5点満点で4.74と高水準だった。

課題と今後の展望

時間割の関係もあり、受講者数は45名と若干少なめであった点が残念である。グローバルな視点で復興を考える授業は、他大学にはほとんどないので、今後、外部講師とも協力しながらより魅力的な内容にしていきたい。また世界の大規模災害から学んだ教訓を、東日本大震災・原発事故からの復興にも活かしていけるように、ワークショップなども取り入れていきたい。

教育②「ふくしま未来学」コア科目授業紹介(3)

むらの大学

丹波 史紀 (行政政策学類 准教授)
中川 伸二 (行政政策学類 教授)

授業のねらい

本授業は、「ふくしま未来学」コア科目の一つで、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故の経験をふまえ、地域課題を発見し、課題解決のための糸口を探していく地域実践学習である。夏休み期間中2週間にわたるフィールドワークをメインとし、事前学習と事後学習で学びを深めていく。また、その学びを地域住民をはじめとした関係者に発表する機会を最後に設けている。

授業内容

フィールドワーク前の事前学習では、被災地の現状を浪江町の職員から伺い、放射線の基礎知識を得たうえで、フィールドワークの実習地である川内村、南相

馬市に日帰りのスタディツアーを実施した。その後、フィールドワークの実習地（南相馬市、川内村）を選択し、2週間のフィールドワークに臨んだ。フィールドワークは、「震災から地域が再生するために私たちができることを考える（行動する）」を目的に、1～10班に分かれて班ごとに目標をたて、学習と実践をすすめた。フィールドワーク後は、班ごとにふりかえりを行い学びを深め、地域の方々を招き、地域での学びを発表する報告会を現地で実施した。

授業の成果

2週間のフィールドワークを通し、地域の方々の温かさや生き方、震災の経験にふれることで、大学では学ぶことのできない、地域に滞在したからこそ得られるものが数多くあった。地域の現状を知るにつれ、地

一年間の授業スケジュール

4月	授業	被災地の現状(講義): 浪江町役場職員
5月	授業	川内村について事前学習
	スタディツアー	川内村で現地実習(日帰り)
	授業	川内村現地実習のふりかえり
	授業	放射線の基礎知識(講義): 東京大学 坪倉医師
	授業	南相馬市について事前学習
	スタディツアー	南相馬市で現地実習(日帰り)
6月	授業	南相馬市現地実習のふりかえり
7月	授業	南相馬市/川内村 希望する地域を選ぶ 事前学習: フィールドワークに向けて、各グループで目標を立て、学習をすすめる
8月	フィールドワーク	南相馬市を選んだ学生 8月21日~9月3日 9月2日 フィールドワークの成果報告会
9月	フィールドワーク	川内村を選んだ学生 9月4日~17日 9月16日 フィールドワークの成果報告会
10月	授業	事後学習: フィールドワークのふりかえり、まとめ
11月	授業	むらの大学成果報告会に向けた発表準備
12月	成果報告会	12月5日 成果報告会 南相馬市 12月13日 成果報告会 川内村

域再生のために自分たちにいったい何ができるのだろうかと悩みながらも、自分事として地域課題に向き合おうと意識が変わった受講生も多かった。そして、今後も地域に深く関わっていきたいという学生もあり、継続的に地域に関わる機会をつくっていく。

さらには、今年度は2年目であることから、昨年度の受講生がフィールドワークに参加し、受講生をサポートしたことは大きな成果であった。

課題と今後の展望

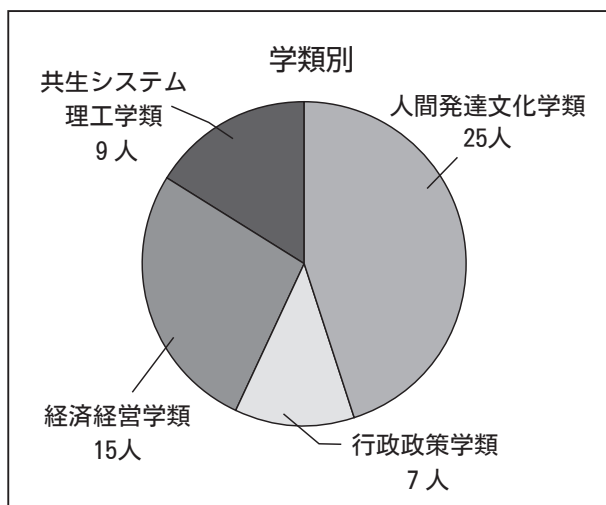
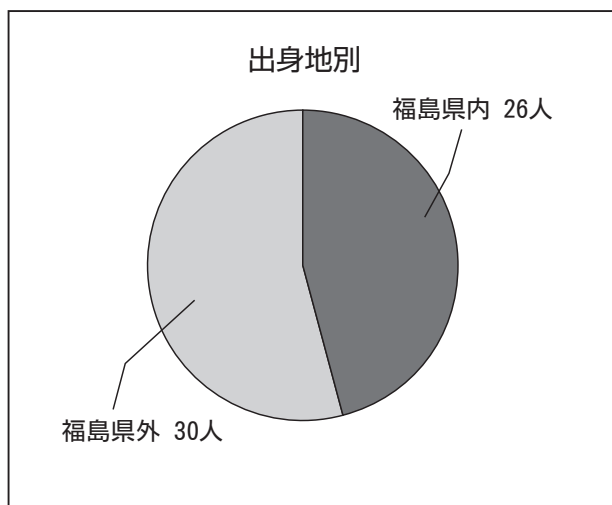
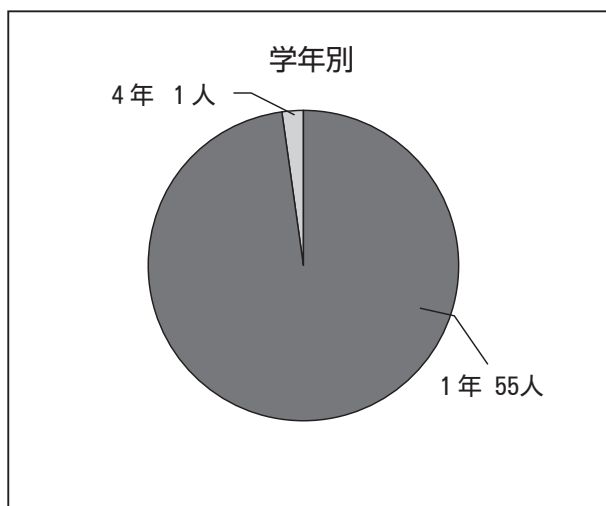
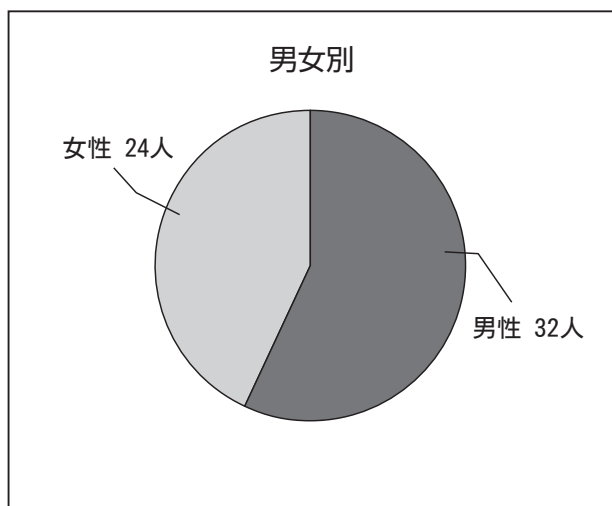
昨年度の受講人数に比べ、受講者数が56名と約3倍になったことで、フィールドワークのプログラムを学生自身が主体的に組み立てる形態をとることは難しかった。

来年度は、これまで実施をしてきたプログラムを改め、地域に滞在し学ぶ「むらの大学Ⅰ、Ⅱ」と、地域での実践のためのプログラムを立案し実施する「むらの大学Ⅲ、Ⅳ」を新規科目として開講する。

地域に継続的に関わる学生もさらに増えると予想され、また、それをモデルとして、より地域で学ぶ学生も増えることが期待される。

参加学生属性

受講者数 56名



南相馬市フィールドワーク実施報告

フィールドワークのねらい

地震・津波・原発事故による影響で、小高区・原町区・鹿島区からなる南相馬市は、さまざまな状況が発生し課題も複雑である。前半は震災前後の暮らしを知り震災・原発事故がどのような影響を人々にもたらしたのかを知り、後半は学生がプログラムを考えた。実際に現地に滞在しながら状況の異なる人々との交流を通し、

学生が地域課題を多面的に捉え自分事として考えるきっかけとなることをねらいとした。

実施内容

学生22名が参加し、市営住宅と仮設住宅の集会所の4カ所に分かれて滞在しながら2週間のフィールドワークを行った。

1 週目	目標：地域を多面的に知る
8月21日(金)	【原町】桜井市長表敬訪問、市職員から概況説明、小高ワーカーズベース 代表取締役 和田智行氏・NPO法人浮船の里代表 久米静香氏から小高区での取り組みについて話を伺う(全員) 【鹿島】セデッテかしま訪問、真野川漁港の見学(鹿島区役所職員、漁協理事 松野豊喜氏の話をお伺い)
8月22日(土)	【小高】ひまわりカフェ訪問、ガイナックスイベント手伝い(1,2班)／住民の集まり「芋こじ会」に参加、真綿を使ったワークショップ(3,4班)／有機農業を続ける根本洗一氏の畑を訪問・話を伺う、エナージャイズ・クリントン・カウンティ ディレクター のテイラー・スタカート氏との意見交換(全員)
8月23日(日)	【小高】住民の案内により小高区の津波・地震・原発被害を視察(1,4班) 【原町】37カフェ訪問、道の駅・じゃぶじゃぶ池(キッズイベント会場)視察(2班)／市役所職員・住民と共に原町区の文化財めぐり、佐藤じてんしゃ屋訪問(3班)
8月24日(月)	【原町】仮設住宅・借り上げ住宅の住民との交流(2,4班)／みなみそうま復興大学にてふりかえり(全員) 【原町】南相馬ソーラー・アグリパークにてプロジェクト立案研修(全員)
8月25日(火)	【鹿島】菅野漬物食品訪問(1,3班)
8月26日(水)	【原町】キッズイベント広報活動：ひばりFM、記者クラブ等(2班)／まちあるき、高校生へのヒアリング(3班) 【鹿島】仮設住宅 自治会長 藤島昌治氏、のらとも農園 廣畑裕子氏より話を伺う(1,4班)
8月27日(木)	【小高】小高卓球クラブのみなさんとの交流会[卓球、BBQ](全員)
2 週目	目標：私たちにできることを行動におこす
8月28日(金)	【原町】まちあるき、南相馬観光協会訪問、南相馬市博物館見学(1班)／南相馬ソーラー・アグリパーク訪問、ヒアリング(2,4班)／「榮泉堂」訪問・ヒアリング(4班)／みなみそうま復興大学にてグループワーク・ふりかえり(全員) 【小高】住民へのヒアリング(4班)
8月29日(土)	【小高】「ひまわりカフェ」と住民の方のお宅訪問・ヒアリング(3,4班) 【原町】じゃぶじゃぶ池(道の駅)にて学生企画キッズイベント実施(1,2班)
8月30日(日)	【原町】もとまつり見学(1班)／牛越仮設住宅訪問・ヒアリング(4班)／みなみそうま復興大学にて発表に向けたグループワーク(全員) 【鹿島】馬主さんのお宅訪問・北郷騎馬会長の話を伺う(1班)／セデッテかしまにて「油菜ちゃん」の販売手伝い・相馬農業高校の生徒との意見交換会(3班)
8月31日(月)	【小高】「菓詩工房わたなべ」、「おだかのひるごはん」ヒアリング(4班) 【原町】みなみそうま復興大学にて発表向けグループワーク(全員) 【鹿島】鹿島区役所 佐伯雄一氏へヒアリング、まちあるき(3班)
9月1日(火)	【原町】みなみそうま復興大学にて報告会に向け半谷栄寿氏による発表アドバイスおよびまとめ作業(全員)
9月2日(水)	【原町】南相馬市民情報交流センターで2週間の学びをお世話になった方へ発表(全員)
9月3日(木)	片付け

学生の声

●人間発達文化学類 男性

フィールドワークに参加するまで持っていた考え方や推測を良い意味で裏切られたと共に、その感覚を周りに伝えたいし、来てもらいたいと強く思うようになった。

●人間発達文化学類 男性

南相馬の方たちが、ふるさとを思う気持ちを感じることができた。故郷愛というものがよく分からないと日頃思っていたが、このFWを通じてわかったような気がした。

●行政政策学類 女性

誰もが不安を感じていても、様々な活動に取り組んでいることを知り、私もできることから始めたい。2週間で考えが変化し、多くの経験ができ貴重な時間だった。

●経済経営学類 女性

1ヶ月に1回でも小高に来て、お話を聞きどのように町が形成されるのか、そこに携わる人達はどんな想いを持っているのかその経過を見ていきたい。その中で私が手伝えることがあれば、小さな事でも現地の方の力になれるような活動をしてみたいと思う。

●共生システム理工学類 男性

復興のあり方について考えさせられた。何をもって復興とするかは、非常に大切なことだと思った。南相馬市の人でも、それぞれに多種多様な考え方があり、単純に何が正しいと言える問題ではないということが印象に残った。

ステークホルダーからの声

南相馬、特に避難区域である小高でのフィールドワークは、被災や帰還・賠償など、あらゆる課題に対して

異なる考え方を持つ人たちとのコミュニケーションを重ねることが重要になります。非常にハードな作業ですが、学生のみなさんが徐々に積極性を発揮して地域に溶け込んでいく様子は非常に頼もしく思えました。今回の学びと経験を活かして、学生らしい大胆な発想と活力を南相馬にもたらしてくれることを期待しています。

(株式会社小高ワーカーズベース

代表取締役 和田 智行 氏)

成果

実際に地域に滞在し、地域の方の想いを聞くことで、この地域の現状と抱える課題の複雑さを実感した。人それぞれ違う考え方・思いがあることを知り物事を表面的な部分で判断せず、その背景を理解しようとしていた。地域の現状を知るにつれ、地域再生のために自分たちにいったい何ができるのだろうかかと悩みながらも、住民との交流を通して、自分事として地域課題に向き合おうと意識が変わってきた。南相馬市で強い思いで取り組んでいる方の姿や言葉に心を動かされ、今後も深く関わっていききたいという思いが生まれた。

課題と今後の展望

宿泊施設の1つとして仮設住宅の集会所を利用させていただいた。住民との間に距離があったので、最初に交流会をひらくなどし、まず住民との関わりをつくる必要があった。

今回は、主に表に出て活動している方や場所に主に焦点があっていたが、そうではない部分に対しても取り組んでほしいとの要望もあり、来年度に向け住民の方とより深いつながりを作りたいと考えている。





「むらの大学」授業以外での活動

フィールドワーク以外にも学生の知見を広げるため、希望者が南相馬市を訪問し地域の方との交流やお手伝いを行った。

○5月31日(日) 田植え体験(小高区)

スタディツアーの後、学生・教職員17名が南相馬市に宿泊し、翌朝、田植えの手植え体験をした。

人数：学生10名

○6月20日(土) みなみそうま復興大学除幕式・記念シンポジウム(原町区)

地域と大学の連携、協働を通じたまちづくり、ひとづくりを目指した拠点施設の開所式に参加した。

人数：学生6名、教員3名

○10月4日(日) 稲刈り体験(小高区)

5月に田植えをした田んぼで稲刈り体験をした。

人数：学生9名

○10月17日(土) 小高区復興文化祭(小高区)

フィールドワークでお世話になった方々のブースで販売等のお手伝いをした。

人数：学生6名

○10月24日(土) 玉ねぎの苗植え(小高区)

フィールドワークでお世話になった小高区で有機農業を続けている方の畑で、玉ねぎの苗植えの手伝いをした。

人数：学生3名

○11月3日(火・祝) あきいち(原町区)

「むらの大学」における活動の様子を「みなみそうま復興大学」内に展示。訪れた方に活動を説明し、コーヒー等を提供した。

人数：学生4名

○12月19日(土) 餅つき(小高区)

田植え・稲刈り体験をした田んぼで収穫された餅米で餅つきをし、地元の神社に奉納した。

人数：学生3名

○9月～12月、3月 芋こじ会(小高区)

月末の土曜日に、「NPO法人浮船の里」で開かれている小高住民のための話し合いの場「芋こじ会」に参加。

人数：学生のべ11名



川内村フィールドワーク実施報告

フィールドワークのねらい

川内村は東京電力福島第一原子力発電所の事故により、一時全村が避難区域となり、避難を余儀なくされていた。平成24年の1月には帰村宣言が出され、現在も一部地域は避難区域となっているが、ほぼ村の全域で暮らすことができる。今年度は、避難が解除され約3年が経過した川内村の生活や、生活するうえでの地

域の課題を学生自身が発見し、グループで話し合いながら、解決策を考え、行動につなげていくことを目的に実施した。

実施内容

学生34名が1区集会所、2区民家に分かれて滞在し、2週間のフィールドワークに参加した。

1 週 目	目標：地域を多面的に知る
9月4日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・開講式 村長や商工会長、関係者にごあいさつ(全員) ・教育長、川内小学校校長講義(5, 6, 10班) ・1区歓迎会(7, 8, 9班)
9月5日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・かわうちオリンピックに参加(全員) ・敬老会手伝い(6, 8班)
9月6日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ・2区住民とカーリンコン(5, 6, 10班) ・区長の案内で1区めぐり(7, 8, 9班) ・秋元初夫氏の案内で川内村めぐり(5, 6, 10班)
9月7日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・商工会、あれこれ市場、いわなの郷にヒアリング(5, 6班) ・1区にてお祭り、企業、Iターン者にヒアリング(7, 8, 9班) ・小学校見学、部活等に参加、村の若手とバレー交流(10班)
9月8日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・農業者に聞き取り、野菜教室に参加、福井大学と交流(5, 6班) ・牛せり見学(7, 8, 9班) ・小学校の授業、興学塾見学(10班)
9月9日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・2区の役員に聞き取り、そばうち体験(5, 6, 10班) ・流しそうめん準備(7班) ・RCF復興支援チーム山本氏講義、3区で聞き取り(7班) ・仮設住宅、災害公営住宅の住民と交流、ヒアリング(9班)
9月10日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・コドモエナジー、とりじ商店にヒアリング(5班) ・景観や暮らしについてヒアリング(8班) ・獅子舞の練習見学(5, 6, 10班) ・流しそうめん準備(7班)
2 週 目	目標：私たちにできることを行動におこす
9月11日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・移動販売に同行、見学(6班) ・こんにゃく作り、流しそうめん準備(7班) ・小学校授業、放課後こども教室の見学(10班)
9月12日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・上諏訪神社例大祭に参加、屋台の手伝い(5, 6, 10班) ・1区高田島豊年踊りに参加(全員)、流しそうめんの実施・味噌田楽のふるまい(7班)
9月13日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ・1区高田島例大祭に参加(7, 8, 9班) ・下川内神社例大祭に参加(5, 6, 10班)
9月14日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・2週間の学びを報告する成果報告会に向けたまとめ作業(全員)
9月15日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・2週間の学びを報告する成果報告会に向けたまとめ作業(全員) ・元役場職員 井出寿一氏に講義および発表へのアドバイス(7, 8, 9, 10班)
9月16日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・成果報告会－2週間の学びを報告－(全員)
9月17日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け

学生の声

●人間発達文化学類 女性

今回フィールドワークでは人生で1番真剣に話し合いをしたのではないかと思っています。

自分の意見をしっかり伝えられるようになったり、相手の話をしっかり聞けるようになったり、グループディスカッションが何よりうまくできたことにとっても嬉しさを感じています。

●行政政策学類 男性

実際に足を運んでみなければわからないことを多く学ぶことができました。実際にお話を伺い、実際に自分の目で見て、実際に感じる。当たり前のように大事なことです、なかなかできることではありません。そういったことを経験できたことはこれからの糧になっていくと思います。

●経済経営学類 女性

事前学習時の川内村の印象として、『村民が暗く、元気がない』というイメージを持っていましたが、実際にフィールドワークに参加し、地域の方と触れ合ってみると、とても明るく元気で、考えていたことと真逆でした。また、今回川内村で見たことや聞いたこと、感じたことなどを周りの人たちに話していきたいと思えます。

●共生システム理工学類 男性

フィールドワークを通して自分自身が成長したと思うことは、聞き取った内容をまとめる力がついたことです。まとめる力は今後の人生でも必要となってくるので成長できてよかったです。

ステークホルダーからの声

若い大学生が村を闊歩する姿は刺激的であり、復興を進めていく上で元気になる。子どもたちにとっては、大学生を身近に感じる機会になり、いい経験になっている。地域にとっては、学生の視点によって外から村を見ることができ、地域の宝や、よさを再認識する機会になっている。今後川内村は、復興のその先にある新しい村づくりを目指していく。そのためにも学生さんには、村に継続的に関わってほしいと期待している。

(川内村長 遠藤 雄幸 氏)

成果

- 地域でしか学べない貴重な経験ができた

2週間滞在し、地域の方々の温かさ、生き方、震災にふれることで、大学では学ぶことのできない、地域に滞在したからこそ得られるものがたくさんあった。

●集団生活の難しさ、協調性の醸成

昨年より人数が多く、その分色々な性格の学生がおり、協力して生活する難しさはあったが、ひとり一人を理解し認めあい、団結したときには大きな力を発揮した。また、助け合って生活することで協調性が醸成されたように感じる。

●新しい地区との関わり

2区の民家を借りたことで、2区の役員をはじめとするみなさんとの関わりがでてきた。当初交流なども断られていたが、宿泊していることで接点も生まれ、色々と助けてもらうことが多かった。お祭り後のかきめきでは、区長や役員の地域に対する思いも聞くことができた。また、晴れていたら種まきを手伝ってほしいとの要望もあったが、あいにくの雨でできなかった。今後、作業や手伝いを通じて関わりを継続していきたい。

●民泊の実施

今年度初めて1区では民泊を1泊2日で実施した。学生からは、実際に泊まることで色々な話ができたと好評であった。報告会の際には、民泊を受け入れた家庭が多く来ていた。区長からは、来年はもっと受け入れ家庭を増やしていきたいとのことだった。

課題と今後の展望

●2ヵ所での宿泊について

川内村を希望した学生は34名で、同じ場所に宿泊することができず、2ヵ所で分散し宿泊することとなった。分散して宿泊しているものの、同じ川内村でフィールドワークをしている仲間意識を醸成するため、34名全員で行う合同ふりかえりを2回行った。その日のふりかえりは、各宿泊場所で行っているため、別の宿泊場所のグループの活動内容を聞く機会を作ったのはよかったと思う。しかし、移動の際の交通手段、常々の情報共有等を考えると、宿泊場所が2ヵ所というのは大変であった。

●昨年の受講生、教員や職員の関わり

昨年受講した学生が、1年生のサポートとして参加してくれた。受講者の人数が多いため、配慮がいきわたらない部分を自ら気づきフォローをしてくれ、大変助かった。教員や職員、昨年度受講生ともに、事前に目標やどの部分を手伝ってもらうかなどの共有が足りなかったため、個人に任せた部分が大きかった。



「むらの大学」授業以外での活動

フィールドワーク以外にも学生の知見を広げるため、希望者が川内村を訪問し、地域の方との交流やお手伝いを行った。

○4月29日(水・祝) 上諏訪神社(川内村) はるまつりに参加

「むらの大学」授業オプションとして、「みらいバス」と同時に実施した。

参加者：学生5名、教員1名

○5月10日(日) 田植え体験

村でいち早く水田を再開した秋元美誉氏の水田で

田植えを行った。

参加者：学生14名、教員1名

○5月23日(土) 川内小学校保育園合同運動会に参加&手伝い

参加者：学生6名

○7月5日(日) 高田島フェスタ(川内村)

フィールドワークで訪れる第一区高田島で、住民の方々とグラウンドゴルフ等を通して交流した。

参加者：学生4名

○7月19日(日) 菜の花種取り

昨年の「むらの大学」の受講生が植えた菜の花の種を採取する作業を手伝った。

参加者：学生4名

○10月17(土)、18日(日) そばフェスタ in かわうち

川内村のそばをPRするためのイベントに、フィールドワーク中にそば粉を使ったピザを考案したグループを中心としてピザを提供した。



参加者：学生14名

○11月29日(土) いわなの郷20周年感謝祭

そばフェスタに続きそば粉を使ったピザを提供し、大好評だった。

参加者：学生9名

「むらの大学」における 指標開発と運用について

目 的

昨今、体験実習を通じた学習成果を「見える化」することにより、教育の質を保証することが求められている。本事業においても、「ふくしま未来学」がめざす5つのコンピテンシーが学生にどれだけ養われたのかを評価し、プログラムの質の向上をはかることが不可欠である。したがって、「ふくしま未来学」における5つのコンピテンシーに基づいた学生の能力の形成及び学生と教員の相互理解を目的に、指標の開発と導入に取り組む（この指標は、学生の成績評価には反映しない）。また、学生においては、学修成果を可視化することを通じて、経験学習の省察と経験の言語化を促進することをねらいとする。

実施内容

今年度は、「むらの大学」において指標の開発と運用を行った。開発及び運用においては、人材育成評価について専門性を持つ事業者と協働実施した。

まず、指標開発においては、「ふくしま未来学」の5つのコンピテンシーに基づき、12の具体的な達成目標を設定した。さらにその目標ごとにStep 1～6の段階を設け、学生がどの段階にいるのかを学生及び教職員が相互に認識できる指標を作成した。

次に、指標の運用においては、「GLidD support」（省察支援システム）を導入し、フィールドワーク及びフィールドワーク後の学習による変容を確認した。学生は、指標をもとにした質問に答えることを通じて、自らが経験した事柄や行動、考えの変化を言語化し、省察をした。教職員は、学生がGLidD supportに入力した内容の整合性を確認し、学生の状態を把握及び評価をした。

結 果

GLidD supportを用いて学修成果の可視化を行った結果、以下の観察事象を得られた。

1. 経験学修の言語化の促進、理解の具体化

GLidD supportをはじめ実習ノート等でふりかえ

りを継続して行ったことで、学生は経験を言語化し、自らをふりかえる力がついた。

2. 活動目標、活動課題の理解の相違

班の目標と個人目標の設定や捉え方に相違が見られた。事前学習やフィールドワークの際に学生が自ら「目標に立ち返る」ことができるように働きかけが必要であることが分かった。

3. フィールドワークにおける自発的な情報の収集、探索

事前学習やフィールドワークにおいて、学生の「知らないことを自ら調べる」習慣が乏しい傾向が見えた。

4. 議論における疑問や問いかけによる理解の掘り下げが不十分

学生は経験を通じて思ったことや考えたことを自ら発言することを避ける傾向が見え、社会的事象への理解が十分に深まらないことが分かった。

5. 同調性と協調性

グループ学習において、衝突を恐れて発言できず、同調する傾向が強く見られた。

成 果

GLidD supportを活用した評価運用によって、学生のふりかえりの促進につながったと同時に、学生が自己や社会的事象を客観的に認知することができた。さらには、学修成果の可視化は、授業内容の課題を明らかにし、プログラムを深化させるためのツールとしても効果があることが分かった。

課題と今後の展開

学修成果の可視化において、学生に負担感がない方法で導入し、教職員から学生に次への課題を適切にかつ効果的にフィードバックする運用方法の模索が必要である。また、指標の運用を通じて見えたプログラムの改善点として、学生の主体性を引き出す工夫と教職員の関与のしくみづくりを次年度にむけて行う。

さらには、開発した指標が、将来的に他の授業に汎用性があるかどうか今後、検証していく。

教育③「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(1)

教育と文化による地域支援モデル

「復興教材づくり論」

松下 行則(人間発達文化学類 教授)

授業のねらい

本年度から、「教育と文化による地域支援」モデル科目の一つとして始めた「復興教材づくり論」について報告する。本授業は、4セメスターの授業で、受講者がそれまでに学習したり、体験したりしたことを学校教育の内容として教材化することを意図して、科目の副題を「大震災教科書をつくろう」とした。受講者は7名だった。

授業内容

第1回のオリエンテーションでは、科目の意図を述べた上で、「Q1 私と3.11」「Q2 3.11以降の私は何をしてきたか(大学1年まで)」を少人数グループで語り合ってもらった。その後、私が書いた小論「復興教育学の構想」について講義をした。そして、それぞれの震災の思いをカルタにしてもらった。

第2回は、各自の探究テーマをウェビング(写真1)し、交流した。第3回から第13回までは、各自が探究したいテーマについて予習を行ってきて、そのテーマについて、少人数グループで学び合い、語り合った。ワールド・カフェ方式を使って、一人一人が全員の探究テーマに関わることができるようにした。毎回授業の最後の20分程度は、学習をもとに震災カルタを作ることを課題とした。第14回は、教材風に作ったポスターを各自発表した(写真2)。第15回は、各自が作った

震災学習カルタ(写真3)をもとに、2つのグループでカルタ大会をやった(授業の様子はYouTubeにアップしてあります。科目名で検索下さい)。

授業の成果

「私は、『学校と震災』という大きなテーマから調べ始めたが、その中で、学校は避難所として、また、他にもたくさんの面で地域と関わっているということが分かってきた。その中で文部科学省は東日本大震災を受けての教育の課題を発表していて、児童・生徒の引き渡し、地域との連携など、細かい部分まで解決すべきものとしてあがっていたので、具体的な対策までしっかりとなれば、震災にもかなりスムーズに対応できるのではと思った。」

学生たちは、それぞれに探究テーマからいかに震災を発信していくかに取り組むができた。

課題と今後の展望

学生に来年度の授業に対する要望を書いてもらった。これらを課題として今後取り組みたい。

- TAや院生など学生以外の視点が交わるとおもしろい。
- 実際に被災した方や復興に携わっている方のお話を聞く機会があるとよい。
- カルタは宿題にして、もっとディスカッションしたい。



(写真1) Aさんの探究テーマ



(写真2) Aさんのポスター



(写真3) Aさんの震災学習カルタ

教育③「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(2)

コミュニティ共創モデル

「社会計画論」

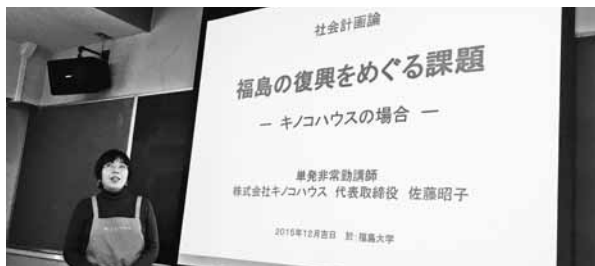
岩崎 由美子 (行政政策学類 教授)

授業のねらい

本授業では、地域の課題解決のために策定された地方自治体レベルの計画に焦点を当て、当該計画の対象や主体、策定・実施・評価のプロセス、上位の行政機関の政策との関連や影響、住民参加のあり方等について考察することを目的としている。とくに、昨今の大きな課題である、東日本大震災・福島第一原発事故からの地域復興や、過疎・中山間地域の再生に向けて地域計画が果たす役割と課題について、事例を通して具体的に学べる機会となるように授業内容を組み立てている。

授業内容

授業担当者による通常の講義に加え、地域社会で活躍するゲストスピーカーによる特別講義や、ワークショップ・グループディスカッションを取り入れている。今年度のゲストスピーカーとしては、紙芝居で被災状況を伝えようと浪江町民有志で結成された「浪江町物語伝え隊」、西会津町の過疎集落で六次化の事業に取り組む佐藤昭子氏、二本松市東和地域を拠点に都市・農村交流事業を展開する菅野瑞穂氏をお招きした。授業の前にあらかじめゲストを紹介する記事を配布し、



各自で質問を考えてくる宿題を課すことで、受講生が自分なりの問題関心をもって話を聞けるように配慮した。

また、ワークショップとしては、受講生が自分の身近な地域について主体的に学ぶことができるよう、出身地の総合計画をあらかじめ読んだうえで地域の強みや弱みを分析し、それらを持ち寄って小グループで検討した。最後の講義時には、その成果を全員で共有できるよう全体発表会を実施した。

授業の成果

ゲストスピーカーの特別講義に対しては、「今まで震災復興関連の話を数多く聞いてきたが、これほどリアルで深い内容の話は初めてだった」や、「自分も被災した県の一員として、まだまだ知らなくてはいけないこと、忘れてはいけないことがあることを強く感じた講義だった」といった感想が多く見られた。また、ワークショップに対しては、「自分から見ればマイナスに見ている要素が他の人からすればプラスとして見えているということを共有できることに、ワークショップのおもしろさと意義を感じた」等、新たな気づきを指摘する声が目立った。

課題と今後の展望

東日本大震災から5年が経ち、受講生の関心が徐々に弱くなっていく中で、いかに震災の経験や復興の課題を風化させることなく伝えていくかが大きな課題である。その点、被災当事者による特別講義は、聞き手一人ひとりの心に届く説得的な内容で学生からの評価も高いため、テーマを吟味しながら今後も継続していきたい。また、今年度は受講生が50名程度だったため、小グループに分かれてのワークショップの運営は比較的スムーズに行うことができたが、大教室での講義におけるワークショップの運営手法については今後の検討課題である。

教育③「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介(3)

地域経済活性化モデル

「Fukushima Workshop (Japan Study Program III)」

吉高神 明(経済経営学類 教授)

授業のねらい

経済経営学類は、「3.11の被災地福島の復興を担うグローバル人材育成」の理念に基づき、2015年4月に「英語副専攻(特別選抜コース)」を導入した。本コースに所属する学生たちは、多様な科目群を通じて、実践的英語運用能力の習得を目指している。現在、特別選抜コースには27名の学生が所属している。「Fukushima Workshop (Japan Study Program III)」は英語副専攻プログラムのコア科目であると同時に、「ふくしま未来学(COC採択事業)」のモデル選択科目でもある。

授業内容

今年度初めて実施された本授業では、福島大学生と上智大学及び立命館大学からの留学生・日本人学生の約30名が5日間(9月14~18日)の集中講義を通じて、福島の復興について共に英語で考えた。授業では、環境、農業、防災、再生可能エネルギー、教育などの分野の専門家による英語での講義だけでなく、東日本大震災の被災地や県内の復興関連施設へのバスツアーも実施した。集中講義のプログラムは以下の通りである。



平成27年度「Fukushima Workshop」スケジュール (すべて英語で実施)

1日目	午前：中井学長への表敬訪問／オリエンテーション 午後：講義(「東日本大震災」・「環境と健康」)&グループワーク 夕方：歓迎パーティ
2日目	午前：福島県水産試験場(相馬市松川浦視察)／津波記念館視察 午後：浪江町視察／南相馬市総合病院訪問
3日目	午前・午後：講義(「食と農」・「防災」・「再生可能エネルギー」)&グループワーク
4日目	午前：福島市放射線モニタリングセンター／除染現場視察(果樹園訪問) 午後：土湯温泉バイナリー発電、小水力発電所見学／おだがいさまセンター訪問(語り部事業)
5日目	午前・午後：講義(「教育」)&グループワーク 夕方：中井学長より修了証授与・お別れパーティ

授業の成果

本プログラムに参加した学生たちからは、「福島の将来について真剣に考えるきっかけになった」、「留学生との交流はとても有意義であった」、「英語力のブラッシュアップになった」、「被災地視察ツアーで多くのことを学んだ」などの意見が寄せられている。今回参加した学生たちは、SNSなどを通じて現在も交流を深めている。

課題と今後の展望

平成28年度以降、Fukushima Workshopは新潟大学と本学が共同採択された世界展開力強化事業(「経験・知恵と先端技術の融合による防災を意識したレジリエントな農学人材養成：2016~2020年」)の一環で、トルコ3大学(アンカラ大学、中東工科大学、エーゲ大学)からの学生を受け入れつつ、実施する予定である。今後も福島大学の学生が本プログラムに多数参加することを望むものである。

教育③「ふくしま未来学」モデル選択科目授業紹介（4）

地域産業・地域環境支援モデル

「地域計画論」

川崎 興太（共生システム理工学類 准教授）

授業のねらい

本授業は、東日本大震災と福島第一原発事故、都市計画・まちづくりの歴史・現状・課題に関する知識を習得することとあわせ、これを活かして実際の場所の課題を解決する上での自分の意見を形成することをねらいとするものである。

授業内容

本授業では、全15回を大きく前半と後半に分けて、それぞれレクチャーとワークショップを行った。

前半のテーマは、「東日本大震災と福島原発事故」とした。東日本大震災の発生に伴う地震・津波被害の実態、地震・津波被災地域での復興まちづくりの動向と



課題、福島第一原発事故の発生に伴う放射能被害の実態、放射能汚染地域での除染・復興まちづくりの動向と課題についてレクチャーを行った後に、「東日本大震災および福島第一原発事故の発生後の福島における地域計画上の課題とその課題の解決策」を課題とするワークショップを行った。

後半のテーマは、「都市計画・まちづくりの歴史・現状・課題」とした。人口減少・少子高齢化が進展する福島県の今後のあり方を検討する上で重要な住宅政策、商業政策、観光政策の歴史・現状・課題についてレクチャーを行った後に、「人口減少と少子高齢化が進む中において、今後、どのような施策が必要か？」を課題とするワークショップを行った。

授業の成果

上述の通り、本授業では、レクチャーとともに、ワークショップを行った。ワークショップでは、少人数のグループを編成し、グループごとに、レクチャーを通じて得た知識を活かしつつ意見交換を行い、その成果を発表してもらった。

ワークショップの時は、特に受講生が生き生きしており、教室は笑顔であふれている。楽しく、かつ、真剣に福島の未来を考え、自分の意見を形成するという、本授業のねらいは一定程度、達成できたと考えている。

課題と今後の展望

受講生には、本授業で得た知識と経験を活かせる機会があればと思う。

「福島大学発アクティブ・ラーニング ～COC科目の実質化にむけて～」

日時：平成27年11月25日(水) 13:30～16:00
場所：福島大学 大学会館2階 大集会室

開催目的

福島大学におけるアクティブ・ラーニングの効果的な運用をめざし、各教員が授業で実施をしている取り組みのノウハウや知識を共有する。

※FD（ファカルティ・ディベロップメント）

知識イコール専門分野を素材に成り立つ学問の府としての大学制度の理念・目的・役割を実現するために必要な「教授団の資質改善」または「教授団の資質開発」（文部科学省定義）

開催概要

第一部 話題提供

1. アクティブ・ラーニングとは

提供者：総合教育研究センター

准教授 高 森 智 嗣 氏

2. 岩手大学におけるアクティブ・ラーニングの事例 学生は被災地から何を学ぶのか～岩手大学初年次 学生必須科目の被災地学修の事例から～

提供者：岩手大学教育推進機構

前COC推進室長 脇 野 博 氏

3. 本学におけるアクティブ・ラーニングの事例

・「学びノート」における学習の定着～災害復興支援学Ⅰ・Ⅱの事例から～

提供者：人間発達文化学類

教授 初 澤 敏 生 氏

・地域に出るって本当に学生の力になるの？～アクティブ・ラーニングの指標化にむけて～

提供者：行政政策学類

准教授 丹 波 史 紀 氏

第二部 意見交換

発表者要約

○総合教育研究センター

准教授 高 森 智 嗣 氏

文部科学省ではアクティブ・ラーニングを「学習者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修方の総称」と定義している。このような「学修方法・学修形態」に着目した定義がある一方、学修者の「学習態度」に着目する見方もあり、アクティブ・ラーニングを一意に定義づけるのは難しい。その中で、アクティブ・ラーニングに組織的に取り組んでいくためには、アカデミックな定義を踏まえつつ、「本学におけるアクティブ・ラーニングとは何か」を定めた上で、それを効果的に提供するための戦略を検討する方が建設的ではないだろうか。アクティブ・ラーニングの設計においては、どのような体験を提供するかが重要となるのは論を俟たない。他方、同様に重要なのは「リフレクション（振り返り）」の機会の提供だろう。経験を体験で終わらせないために、学修目標と（自己）評価に基づくリフレクションが必要である。それを支援するツールのひとつとして、ループリックが挙げられる。しかしながら、ループリックは手段のひとつであり、万能な「魔法の杖」ではない。学修目標、体験の提供、リフレクションを、一体的にデザインすることが重要だろう。



○岩手大学教育推進機構

前COC推進室長 脇野 博氏

岩手大学では、「地域のための大学」として全学的に地域再生・活性化に取り組む教育カリキュラム・教育組織の改革を行ってきた。その中のひとつに、全学部の1年次学生を対象に行う「被災地での学修」を全学必修化した。基礎ゼミナールで実施をし、学生が被災地に出向き地元の方の話を聞くことで岩手県への理解を深めるとともに、復興に向けて何ができるかを考えるきっかけづくりとしている。必修化にむけて本学では、教員向けのガイドラインの作成や基礎ゼミナール情報交換会の実施、学生向けの震災復興に関する学修の手引きを作成するなど、引率教員の負担軽減の工夫を行っている。

この「被災地での学修」を通じて学生は、「一般」視点から、「当事者」視点を得ることができた。さらに、学生の主体性の持続、発展・定着を意図して、他の授業科目や自主ゼミという形でその成果を引き継いでいるところもある。



○人間発達文化学類 教授 初澤 敏生氏

アクティブ・ラーニングは資料やデータ等に基づき、論理的に主張を組み立てる「学習者の思考の深化」が重要であると考えている。「災害復興支援学」は、多くの教員が獲得した「支援知」を学生に伝えるとともに、それを活用して次の世代の支援者を育成することを目的としている。オムニバス方式で行われている本授業は、学生の学習意欲の向上と授業時間外の学習確保が課題であった。そこで、学生の学習を定着させる「学びノート」を考案した。学生が記述をすることを通じて、授業内容の一部を学生自らの関心に引きつけて焦点化し、能動的に学習をすすめることをねらいとしている。さらには、授業の最終回に学びノートを学生間で回覧することを通じて、新たな気づきができるように工夫している。

学生へのアンケート結果から、学生にとって非常に大きな効果があった。しかし、「学びノート」は能動的な活動を行う学生の力を伸ばすには役立ったが、そうでない学生に対しては、十分な効果を発揮できなかった。また、「情報収集の方法」に関しては評価が低く、「学び方を学ぶ」部分がオムニバス方式の弱点とも言える。今後改善の検討が必要である。



○行政政策学類 准教授 丹波 史紀氏

実習や体験型の授業、ボランティア活動が増えている中で、学生の学びにより一層つながる効果的なアクティブ・ラーニングをそうした体験にどのように取り入れていくかが課題である。さらには、アクティブ・ラーニングや地域に出ていくことが、学生の学びの発展にどのようにつながっているか「評価」をすることが必要である。

そこで、「ふくしま未来学 (COC事業)」で行う地域実践学習「むらの大学」において、5つのコンピテンシーに基づいた学習目標・成果を可視化する指標開発を行った。この指標は、成績評価のためではなく、学生自らが学習の到達度を理解するとともに、学生と教員が同じ目線で到達度を把握することを目的としている。指標の運用としては、GLiD (省察支援システム) を用いて、学生が経験学習の言語化に取り組んだ。その結果、学生のふりかえりの促進につながると同時に、



授業内容を深化させるためのツールとしても効果があることが分かった。開発した指標が、将来的に他の授業に汎用性があるかは検証が必要である。また、アクティブ・ラーニングに関わる全般の課題としては、持続的に行うために教員ひとりひとりの姿勢だけに依存しない体制づくりが今後必要である。

質疑応答

総合教育研究センター 高森 智嗣准教授：

ルーブリックやGLidDのような評価基準を作った際、学生の発見に対する評価を教員がどのようにすればよいのか。つまり、学生が何か発見していればそれでよいという考え方なのか、それとも教員側が「こんな発見をして欲しい」という想定を持ち、それとズレているのであれば修正を必要とする考え方なのか。被災地に行って、被災地の発見をしなければいけないのに「被災地の割には風景がきれいでした」というものに対しては、どういう評価をすればいいのかと思っている。ご意見があれば伺いたい。

岩手大学教育推進機構

前COC推進室長 脇野 博 氏：

被災地学習の評価基準については個人的な思いだが、あまり厳密に評価できないし、しなくてもいいのではと思っている。その子なりに何か発見、気づきがあればそれでよしと。気づきや発見が、あまり関係のないものであっても、もう少し具体的に「なぜそう思ったのか」探っていき、その上で前後の変化を判断していけばいい。常識的に考えれば、被災地に行って被災と無関係なことしか思わないということはあるえないため、一見かけ離れた感想でも、被災地に行った刺激で、自分の価値観が変わったということが分かればよいのではないか。

行政政策学類 丹波 史紀准教授：

「むらの大学」の授業をしているときに、実習に行く前の地域に対するイメージと、実習に行った後の変化を絶えず聞くようにしている。「行ってみたらこうだった」ということを発表している。それが「景色がきれいだった」でもかまわない。認識の変化があったか、ないか。少し違う視点だが、GLidDやルーブリックは、アクティブ・ラーニングや共同学習においては、グループ毎の評価になる。グループの中で、自分がどんな貢献や力を発揮したかを、もっと正当に評価するために、

今回GLidDを導入した。もう一つ、学生一人一人の学習到達度や能力形成に目を向けているが、大学全体の視点から考えると、いつも地域は消費されるばかりではないので、地域自身がどう変化したのか、力をつけたのかを、もう一回大学として評価していく。学生が入る事で地域がどう変化したのか、発展したのか、大学自身がアクティブ・ラーニングしていく際には、そうした目線を持たねば、毎年毎年同じようなことを繰り返すことになる。

人間発達文化学類 初澤 敏生教授：

私は地理学が専門で地理学実地研究という授業をしている。そこで行っていることに、私が学生の時に指導教員に言われた言葉で「4：2：4（事前学習が4、現場が2、後のまとめが4）」というものがある。現場ばかりを重視してはいけない。事前にきちんと学習するからこそ、現地学習が活きるのだと。社会科の授業における見学学習はまさにそう。事前学習がない見学などはありえない。事前に勉強をしていたからこそ気がつくということは多数ある。事前の学習を徹底的に行い、学生達が自分の興味関心を焦点化していくことが必要である。逆に、現場を見た結果「あれっ、違うじゃない」というようなことや、「前に読んだ偉い先生が書いた論文、でたらめじゃない」というケースも数多くある。では正しいことは一体何なのか、それを学生達がきちんと考えていく。現地実習は非常に重要だが、それ以上に事前学習が重要であると思う。

参加者（教員）：

アクティブ・ラーニングは、いろんな意味合いがあると分かった。岩手大学の脇野先生がまとめられた3つの目的「技法知、学問知、実践知」について、アクティブ・ラーニングは、技法知と実践知が両方一緒になって進んでおり、教員側が何を教えたのか、「むらの大学」で言えば「実践知」をメインにして「技法知」も勉強してもらおう、という位置づけではと思った。教養演習のような基礎的な科目であれば「技法知」をメインにして、時々「実践知」と思った。

高森先生のおっしゃった、ルーブリック、評価指標4段階評価をACF（アカデミア・コンソーシアム・ふくしま）の授業でアンケートの回答を見た際、「よくできた」と言う学生もいれば、「全然ダメでした」と言う学生もいるが、私から見たら「全然ダメでした」と言う学生が一番頑張っているように見える。自分に厳しい学生もいれば、自分に甘い学生もいて、単純に割

り算して平均してしまうと、わけのわからない数値になってしまう。もう少しきっちり評価できるループリックの尺度というものはあるのか。

総合教育研究センター 高森 智嗣准教授：

まったくその通りで、それは評価の妥当性と信頼性という概念があった時に、信頼性に該当する概念。信頼性とは「異なる状況で誰が何回行っても同じ結果になる」ことが評価の信頼性になる。バイアスのかからない評価。自分に謙虚な学生でも、甘い学生でも、客観的な指標に基づいて質的な評価ができるのが理想。それをサポートするツールが、先ほどのGLidDやループリック。自己評価を5段階でと言われると、なんとなく3をつける傾向があり、ハロー効果や天井効果が起きるが、先ほどのACFのアンケートは5段階だけを提示しているため、そういう状況が起きている。それを解消するために、「この段階にあれば3をつける」という風に標準化を助けるループリックを作ることに取り組んでいる。

アンケート結果（一部抜粋）

- 私の専門分野である法律学は特にアクティブ・ラーニングの視点が欠ける領域なので、具体的な実践例など分かり参考になった。これまでアクティブ・ラーニングというと、小中学校の体験学習みたいなもので、大学でまでやることかと考えていたが、考えが変わった。
- アクティブ・ラーニングだけに焦点をあてて授業を実施するのではなく、知識習得（講義等）と併せて学習方法を組み立てることが必要なことが分かった。
- 知らないことばかりで大変勉強になった。GridDにおいて教員と学生の応答問題の中で、ともに力量が高まっていくことが重要との指摘が興味深かった。GridDを演習の中で活かしていけたらと思った。
- 講義と演習とフィールドの3者の一体的理解が不可欠だと思った。COCモデル選択科目を来年担当するので、学修目標、成果の可視化、評価指標を自分の科目で応用してみたい。

成 果

本学におけるアクティブ・ラーニング推進にあたり、評価方法におけるしくみの構築が課題であることを明らかにすることができた。

また、各教員が授業で実施をしている取り組みや目的、成果を共有することができた。「学びノート」及び「GridD」の取り組みを初めて知る先生方が多くいたことから、今回のような実践報告の場は、学生の学びの深化や各授業における教育効果の向上を目指していくにあたり、継続的に行うことが必要であることが分かった。

さらに後日、参加者のひとりである経済経営学類の教員から、岩手大学の被災地学修の事例報告を受け、本学類においてアクティブ・ラーニングを取り入れた事業を行いたいという相談をCOC事務局が受けた。具体的に、平成28年度から経済経営学類の新1年生（約200人）を対象に、被災地の復興や地域再生の取り組みを学ぶ学外研修を教養演習にて行うことになった。

今後の課題

開催時期や時間帯を検討し、より多くの教員の方に出席いただけるよう工夫が必要である。さらなるアクティブ・ラーニングの効果的な運用と推進にあたり、各教員が授業で実施をしている取り組みのノウハウや知識を共有し議論していくために、他部局とも連携しながら継続的に実施していく。



【小括】教育事業の課題と今後

ふくしま未来学推進室委員

遠藤明子

(経済経営学類 准教授)

「ふくしま未来学」は、平成26年度以降に入学する全学類生を対象とし、本学の正規科目として構成された教育プログラムである。全学共通を基本とする「コア科目」と、各学類の専門科目に根ざした「モデル選択科目」によって構成されている。

平成27年度時点の開講実績は、コア科目が13科目(共通領域12科目、人文社会学群科目専門領域1科目)、モデル選択科目が98科目(人間発達文化学類系26科目、行政政策学類系44科目、経済経営学類系16科目、共生システム理工学類系12科目)である。

これらの多くは既存科目の中から指定を受けたものだが、COC「地域志向教育研究経費」採択プロジェ

クトからの新設科目もいくつか誕生していることは特筆すべきである。

また、コア科目では、各科目の担当教員が意見交換する担当者会議が年2回(4月、9月)開かれており、「ふくしま未来学」の基盤が共有されている。他方、モデル選択科目の指定は担当教員の裁量によるものであり、「ふくしま未来学」に対する教員の自発性が重視されている。その結果、「ふくしま未来学」の一貫性と科目群の多様性が両立し、そのことが教育プログラムとしての大きな特長となっている。

きたる平成28年度には「ふくしま未来学」が3年目となり、完成年度を迎える(注)。教育プログラムとしての評価を最も注力すべき年度となるだろう。

注:「ふくしま未来学」の「完成年度」は、平成26年度入学生が3年次に進級した段階で対象科目をすべて受講可能となるため、3年目に設定されている。



成果報告／研究



- 地域志向教育研究経費 実施報告
- 地域志向教育研究経費 採択一覧
- 地域志向教育研究経費 成果報告
- 地域再生の先進事例調査 実施報告
- 【小括】 研究事業の課題と今後

地域志向教育研究経費 実施報告

平成27年度 地域志向教育研究経費 実施報告

目 的

東日本大震災および原子力災害からの地域再生に向け、研究面から推進するため、「地域志向教育研究経費」を設置し、地域志向性の高い研究を行う教員に対して研究費を配分した。地域における研究・実践を推進する中で、自治体や住民と協働した教育研究を支援している。今年度は3年目となり、18研究を採択した。

実施概要

今年度の地域志向教育研究経費は、以下の4分野を設定した。今年度から、地域推進費(プロジェクト)に、課題指定型プロジェクトを追加した。これは、双葉郡の地域における復興まちづくりのランドデザイン策定につながる研究に発展させることを目指す常勤教員を対象として設置した。

- (1) 地域協働推進費(地域開放型科目担当者) 200千円×4名 ※人数は募集枠の数。
地域を志向した授業科目の実績がある教員(開講予定を含む)が対象で、「ふくしま未来学」の科目を担当できる教員。
- (2) 地域協働推進費(プロジェクト) 800千円×3プロジェクト
 - ① 課題指定型プロジェクト 1プロジェクト
 - ② 地域協働型プロジェクト 2プロジェクト複数の教員による、教育・研究・社会貢献のいずれかにおける地方自治体等との連携した取り組みが対象で、その成果として「ふくしま未来学」の科目開設を目指す教員。
- (3) 地域調査支援費 200千円×10名程度
地域志向の研究活動を行う教員が対象で、将来的に「ふくしま未来学」の科目の開設、開放科目または公開講座の開設を目指す教員。
- (4) 地域振興推進費 200千円×3名程度
本学学生が自主的・主体的に行う地域活動が対象で、当該地域活動を指導し地域振興を推進する教員。

成 果

今年度は新たな取り組みとして、本経費に応募を希望する教員を対象に説明会を3回行った。説明会は、本経費の目的や理解を深めてもらうために実施したことで、予定していた申請数とほぼ同じで申請があった。また、今年度は双葉郡の自治体で研究を行う教員に対して、課題解決型の協働研究課題公募区分を新たに導入したことにより、研究面での連携自治体との新たなつながりを作ることができた。

課題と今後の展開

地域志向教育研究経費による成果は、年度末に成果報告会を開催し、広く周知している。今年度は、地域の方々をはじめ、より多くの方々に来ていただくため、初めて学外で実施する。来年度は本研究経費を使用し、得られた成果をどのように地域に還元していくか、また地域のニーズをどう教員につないでいくかが課題である。

平成27年度 地域志向教育研究経費 採択一覧

(1) 地域協働推進費

No.	取り組みの名称・科目など	所 属	氏 名	配分金額(円)
1	公共政策論 (既存科目)、演習 (既存科目)	行政政策学類	今井 照	200,000
2	福島県における震災後の域外貨幣流出の調査 (「ふくしま未来学」を、分担で担当)	共生システム理工学類	藤本 典嗣	200,000
小 計				400,000

(2) 地域協働推進費 (プロジェクト)

① 課題指定型プロジェクト

No.	取り組みの名称・科目など	所 属	氏 名	配分金額(円)
1	「学生が考える」地域交通計画のデザイン	経済経営学類	吉田 樹	740,000
小 計				740,000

② 地域協働型プロジェクト

No.	取り組みの名称・科目など	所 属	氏 名	配分金額(円)
1	原発事故に伴う避難指示区域の歴史文化遺産の保全と継承	人間発達文化学類	小松 賢司	800,000
小 計				800,000

(3) 地域調査支援費

No.	取り組みの名称・科目など	所 属	氏 名	配分金額(円)
1	川内村復興再生のための中長期課題と解決の方向 「現代の地域経済」(前期) 「現代アートマネジメント」(後期)	人間発達文化学類	小島 彰	164,000
2	現代アートによる温泉まちづくりの研究調査 2セメ開設・未来学「現代アートマネジメント」(渡邊・小島担当)	人間発達文化学類	渡邊 晃一	199,400
3	「水」を介した地域環境支援モデルのパイロットスタディに関する調査 ・水循環システム概論、水循環システム、流域水循環システム調査実習、(総)水・土地の汚染と私たちの健康生活(すべて既存科目)	共生システム理工学類	川越 清樹	200,000
4	東北南部における埴輪祭祀成立過程の究明 ー須賀川市団子山古墳の発掘調査をもとにー	行政政策学類	菊地 芳朗	200,000
5	福島県南会津町中荒井地区との交流を通じて、農山村のこれからを考える(教養演習、専門演習を通して)	経済経営学類	沼田 大輔	200,000
6	電力会社の会計をかんがえる	経済経営学類	平野 智久	200,000
7	津波被災地区の町会再編に関する事例研究	行政政策学類	西田奈保子	200,000
8	富岡養護学校における学生ボランティアを通じた防災意識の変容(「特別支援教育と学校防災」として開講中)	人間発達文化学類	高橋 純一	200,000
9	震災・原発事故の教訓を踏まえた教育実践に関する調査(既設科目:環境計画論・環境計画演習)	共生システム理工学類	後藤 忍	200,000
小 計				1,763,400

(4) 地域振興推進費

No.	取り組みの名称・科目など	所 属	氏 名	配分金額(円)
1	地域問題解決思考型ロボット教室	共生システム理工学類	高橋 隆行	200,000
2	広げよう 東和の“わ”プロジェクト	行政政策学類	佐々木康文	200,000
3	国見町内谷集落活性化プロジェクト	行政政策学類	岩崎由美子	200,000
4	自己学習プログラム 「むらの大学1期生が行く SO-SO（相双）元気プロジェクト」	行政政策学類	丹波 史紀	200,000
5	金上地区活性化プロジェクト ～子どもたちを地区に繋ぎとめるための地域づくり～	行政政策学類	千葉 悦子	190,000
小 計				990,000

「学生が考える」地域交通計画のデザイン

教員名：経済経営学類 准教授 吉田 樹

対象地域：福島県南相馬市

課 題

原発事故による避難指示区域を抱える南相馬市では、双葉郡の各町村を含め、従前地から離れて避難する市民が多いことに加え、分散して生活する家族も少なくない。一方で、路線バスを中心とした同市の地域公共交通網は、原発事故以前から必ずしも利便性が高い状況にはなく、日常生活に欠かせない移動手段の確保が課題となっている。

今年度、南相馬市では、市内における移動手段の確保・維持・改善方針を定めた「南相馬市地域公共交通網形成計画」の策定を進めているが、経済経営学類吉田ゼミでは、同市復興企画部と連携して、市内の病院や商業施設の来訪者ヒアリング調査を行い、「学生の目線」から公共交通網の改善・活性化方策を提案することを目的とする。

実施内容

2015年9月14日(月)～16日(水)にかけて、経済経営学類吉田ゼミに所属する学生(学類2年次生12人、3年次生9人)とともに、南相馬市での現地調査を行った。主な内容として、①同市復興企画部企画課の協力を得て市内各地の現地視察を行ったほか、②市内の主要な生活関連施設(医療機関や大型小売店)のほか、同市から仙台市や福島市までを結ぶ都市間バスの待合所において、日常の利用交通手段や公共交通サービスに対する意見などをヒアリング調査した(写真)。

その結果、通院や買物目的で路線バスを利用する市民は極めて少なく、高齢になっても自家用車を運転せざるを得ない(原発事故後に自家用車を運転するようになった高齢者も少なくない)ことが分かったほか、そもそも公共交通サービスに関する情報(バス路線図

や時刻表など)が知られておらず、「不安だから」公共交通を利用できない実態も明らかになった。

取り組みの成果

上述の課題を踏まえ、吉田ゼミの学生が5つのチームに分かれて、南相馬市における公共交通サービスの改善提案を行った。買物目的に特化したバス(買物バスツアー)の実施、タクシーにおけるエリア定額制の導入、公共交通マップの製作など多岐にわたる内容であり、2015年11月27日(金)に弘前市で開催された「おでかけ交通博2015 in 弘前」(本学と国土交通省東北運輸局の共催)で各チームの提案を報告し、貴重なご意見をいただいた。また、2016年12月17日(木)に実施された、南相馬市公共交通活性化協議会に参加し、調査結果や提案内容の報告を行った。

今後の展開

学生の提案内容のうち、「南相馬市公共交通マップ(仮称)」の製作を進めており、年度内に完成し、配布される予定である。また、南相馬市では、2016年度の早い時期に「南相馬市地域公共交通網形成計画」の策定が完了し、避難者を含む市民の「くらしの足」を確保・改善するための取り組みがスタートする。公共交通マップについては、同計画案のなかでも継続して発行することが予定されており、生活交通におけるタクシーの活用策についても、学生の提案を踏まえて検討が進められている。



原発事故に伴う避難指示区域の 歴史文化遺産の保全と継承

教員名：行政政策学類 教授 阿部 浩一
人間発達文化学類 准教授 鍵和田 賢
行政政策学類 教授 菊地 芳朗
人間発達文化学類 准教授 小松 賢司
行政政策学類 准教授 徳竹 剛
対象地域：富岡町

課 題

東日本大震災における原発事故により、原発周辺地域への立ち入りや居住が制限されることとなった。その結果、家屋等の管理が行き届かない状況となり、民間で所蔵されている歴史文化遺産は厳しい環境に置かれることとなった。このまま放置しておいては地域の姿を後世に伝えるものが何もなくってしまうという危機感を持った富岡町では、このような民間所蔵の歴史文化遺産を救出するとともに、地域の歴史や文化を再発見することで、富岡町民の「心の復興」を後押ししようと、プロジェクトチームが結成された。

実施内容

富岡町の協力要請を受け、歴史や文化財を専門とする教員が集まって、富岡町の取り組みを支援することとなった。町から救出された歴史文化遺産は、いったん役場で預かることになるため、どのような物を何点預かったのかということ把握する必要がある。そのための「寄託目録」の作成と、概要が分かる写真の撮影を実施することとなった。作業は、大学で歴史や文化財について学んでいる学生や、授業で古文書の取り扱いや撮影の経験を持つ学生の協力を得て実施した。今年度は3日間、のべ49人の学生と教員が参加し、処理した史料点数は約4000点に及ぶ。なお、2月末に今年度最後の作業が予定されている。

取り組みの成果

この事業に参加した学生にとっては、授業で学んだ技術を実践する機会となった。作業を通じて学問的意欲が高まった様子が見え、その教育的効果は大きかった。

また富岡町にとっては、町の歴史文化遺産を残すための作業が進展したことに加え、役場職員が教員・学生とともに作業したことによって、歴史文化遺産の保全に関する知識や技術を習得する機会になったと思われる。

民間所有の歴史文化遺産は、災害だけではなく、代替わりや引っ越し、建て替えなどをきっかけとして失われることもある。また、中山間地域を中心に、存続の危機を迎えつつある集落も少なくない。地域の歴史や文化の継承は全国に共通する課題であり、この事業を通じて形成された歴史文化遺産の救出モデルは、他の自治体にも応用可能なものである。

今後の展開

今年度、約4000点の史料を処理したが、富岡町には、まだまだ救出すべき歴史文化遺産がある。今後も救出作業を継続するとともに、富岡町の歴史や文化に関する調査研究に着手し、町民への成果還元につなげていきたい。



地域問題+ものづくり=福島のみらい

～ 工学的視点から取り組む地域問題 ～

教員名:

共生システム理工学類 教授 高橋 隆行

対象地域: 福島市

課題

福島県は「福島・国際研究産業都市(イノベーション・コースト)構想」を国とともに推進し、「ふくしまロボットバレー」の形成を目指している。これは、浜通り地域を中心としてロボット産業を集積して、震災からの復興と地域の新たな発展を企図している。しかし、福島県内にはロボット教育に対する教育環境がほとんどない事が課題である。これからの将来を担う世代に向けたロボット教育が必要である。

実施内容



これからの将来を担う福島県の小中学生を対象として、高橋研究室の指導の下、ロボット教室を開催した。ここではものづくりの面白さを知ってもらう事を目的とした。また、学園祭等を利用し、学園祭では遊んで知ることの出来る「ものづくり」を実施した。幅広い層にもものづくりを認知してもらい、更なる発展を目指していく。

今年度は、本学の理工学類生のみならず、他学類の学生にも参加可能なロボット教育環境を整え、地域問題に関して「ものづくり」という新しい視点で取り組んだ。

今後も地域の町おこしに「ものづくり」で貢献することで、他学類の参加の敷居を低くし、大学内だけでなく企業との繋がりを持ち、共同で活動を行うことでより地域に密着した活動を行っていきたい。

取り組みの成果

学園祭では幅広い地域の方々にもものづくりを認知していただけた。本活動は、文理融合を考える場となった。

平成28年度は、ロボット教室を地域の小中学生を対象に行う。技術向上として知能ロボットコンテストに出場する。さらに、株式会社アプロガスと白河市のSWカフェと共同開発の計画がある。

今後の展開

これらの活動を継続的にしていき、地域問題に対して「ものづくり」という視点からアプローチをし続ける。福島大学では今以上に開発環境を整備する必要がある。

アプロガス社とはメガソーラー施設に体感型の教育発電ロボットの作製を考えている。この活動は福島のエネルギー問題の教育の場の発展として有用である。

白河SWカフェとは、福島素材を生かしたピザ窯を制作し地産地消を目標に町おこしを計画している。この活動は他学類の参加も大いに期待できる。

地域再生の先進事例調査 実施報告

地域再生の先進事例調査 実施報告 ～岩手・宮城視察～

視察目的

東日本大震災の被災地である宮城県・岩手県において先進的な取り組みを行うNPOや企業、大学を訪問・視察し、今後の事業の取り組みの参考とする。また、「ふくしま未来学入門」のゲスト講師としてお招きする講師との打ち合わせを行う。

視察内容

〈宮城県〉

- ・日時：6月29日(月)、30日(火)
- ・訪問先：宮城県石巻市雄勝町
(体験型複合施設「MORIUMIUS」)
- ・訪問者：COC地域コーディネーター3名

〈岩手県〉

- ・日時：7月6日(月)、7日(火)
- ・訪問先：
 - ① 岩手県宮古市(三陸鉄道株式会社)
 - ② 岩手県盛岡市(岩手大学)
- ・訪問者：丹波史紀COC実施責任者、
COC地域コーディネーター3名

宮城県石巻市で廃校を利用した体験型複合施設「MORIUMIUS」は、その自然環境をいかした研修プログラムを通し地域再生をはかっている。漁師の方と

の交流プログラムに参加させてもらい、地域の方々と直接交流することが大事であると感じた。



漁師に作業を教わりながら交流する様子

三陸鉄道株式会社の望月社長からは、地震・津波からの復旧にかかる想い、「交流人口」拡大に向けた展望



MORIUMIUS (旧桑浜小学校)



車両には企業と連携の証としてロゴやメッセージがある

についてお聞きした。企業とのタイアップによるイベント列車を数多く走らせ、ファミリー層を中心に地元のお客ファンを増やしている。そうした戦略により、ホームページ以外の広告費を使わずに観光客数をのばしていた。



三陸鉄道では「震災学習列車」を運行している

岩手大学では、COC事業の取り組みのなかでも特に新入生が全員被災地に行くという「被災地学修」の取り組みについてお話を伺った。また、課外活動における地域と学生のコラボなど、学生の主体的な取り組みを支える仕組みについても伺い、今後の事業に活かせる部分が多く参考になった。



意見交換の様子

成果・考察

体験型複合施設「MORIUMIUS」での研修プログラムに参加することで、体験型のプログラムを客観的にみることができ、実施における段取りや取り組み方に関して捉えなおす機会となった。地域住民と直接交流することが大切だと実感したことから、「むらの大学」のフィールドワークにおいて、さらに地域の方々との交流できるプログラムとしたい。

三陸鉄道では、震災からの復興の様子を企業との連携やキャラクターを活用し「観光資源」として発信していくことが効果的であることが分かった。福島においても大変参考になる事例を得ることができた。

岩手大学では、実施体制や学内における周知に関して同じ課題を抱えており、試行錯誤して実施していることが伺えた。中でも、新入生全員が被災地に行くという「被災地学修」の取り組みや、インターンシップにおいては、既存の取り組みを活かしながら、それをPBL (Project Based Learning) 科目に取り入れるなどの工夫をしていた。その工夫の一つとして、COC事業に関わる教員を増やすことに力を入れており、教員にCOCの活動を理解し、協力してもらう体制を構築していた。そうした地道なことが大事だとおっしゃっていたことが印象的であり、努力の積み重ねが必要であると実感した。

課題と今後の展望

東日本大震災の被災地である隣県の宮城県・岩手県の状況は、ニュースでしか分からなかった部分も多く、実際に訪れて自分の目で確かめてみることで、復興の状況、住民の様子など分かったことが多かった。中でも、同じCOC事業に採択されている岩手大学の取り組みを聞くことで、実施体制や継続など、同様の課題があることが分かったことも大きな成果であり、今後も情報交換をするきっかけをつくることができた。来年度も本事業に参考になる取り組みを行う団体や大学を訪れ、実際に見て学び、事業や地域に還元していきたい。

【小括】 研究事業の課題と今後

ふくしま未来学推進室委員

菊地芳朗

(行政政策学類 教授)

「ふくしま未来学」では、地域を志向した教育・研究・社会貢献を行うための経費を支援することにより本事業の確実な推進を図ることを目的として「地域志向教育研究経費」を設け、研究事業の柱としている。今年度はこのうちの「地域協働推進費（プロジェクト）」に新たに「課題指定型プロジェクト」を新設し、復興まちづくりに関与する研究・教育活動の機会を設けた。今年度は全体で18件が採択されたが、採択者は全学類におよぶとともに採択テーマも多岐にわたり、「ふくしま未来学」指定科目の充実に結びつくとともに、本事業の学内外への周知に大きく寄与することとなっている。

今年度の採択研究の特色として、学生が前面に出るテーマが目立ち、学生と教員の共同活動の増加がうか

がえる点が見られる。学生が自主的・主体的に行う地域活動を支援する「地域振興推進費」において3件枠のところ5件が採択されたことや、地域協働推進費に採択された2件がいずれも学生が中心的役割を担うものであったことなどである。本事業の実施によって生まれたこの流れを一過性のものとしないうちに、着実かつ息の長い支援体制が求められよう。

また、地域再生の先進事例の調査として、本年6月に宮城県石巻市雄勝に所在するMORIUMIUSを、7月に岩手県三陸鉄道株式会社および岩手大学をそれぞれ視察した。前者は廃校を利用し農業・林業・漁業など多種多様な体験ができる複合施設であり、フィールドワークや地域への関わり方に関する考察を深めた。後者のうち三陸鉄道では、企業との連携やキャラクターを活用した発信、幅広い客層へ向けた豊富なメニュー等を組み合わせて事業を行う事例が大変参考になり、岩手大学では、COC事業を展開する大学同士で双方の事業内容や課題等に関し有意義な意見交換を行った。



成果報告／社会貢献



- 未来バス 実施報告
- ふくしま未来学出前講座 実施報告
- 高校生向けシンポジウム 実施報告
- 【小括】 社会貢献事業の課題と今後

社会貢献①「みらいバス」実施報告

地域と大学をつなぐ「みらいバス」 実施報告

目 的

学生、教職員が幅広く地域に出向く機会を提供し、大学全体としてふくしま地域の現状や課題を学ぶ。また、連携自治体をはじめとする地域や企業と連携協力し、地域にある困り事（ニーズ）や課題に対して貢献をすることをとおして、ふくしまの復興にむけた多様な人とのつながりの創出をめざす。（「ふくしま未来学」の新規事業として平成27年度より始動）

概 要

「ふくしまを知る」ことをテーマに、連携自治体を中心とした福島県内の各地域を訪問するバスツアーを企画した。自治体や企業、NPO等と協働で住民との交流を重視したプログラムを立案、実施した。

- ・対象者：福島大学に在籍する学生、教員、職員
- ・募集人数：各回20名程度
- ・参加者数：のべ106人（実数72人）

実施スケジュール

	日 程	内 容	行き先	参加者数
第1回	平成27年 4月29日（水・祝）	「川内村はるまつり」にて三匹獅子舞の見学	川内村高田島地区	学生15名 教職員5名
第2回	5月31日（日）	「かつらお村民運動会2015」のお手伝い	三春町	学生16名 教職員2名
第3回	7月4日（土）	「五感で楽しむ東和の夏」で住民主体の活動の見学	二本松市東和地区	学生16名 教職員4名
第4回	7月25日（土）	「相馬野馬追」のお手伝い	南相馬市鹿島区	学生4名 教職員4名
第5回	10月12日（月・祝）	「高齢化社会における地域再生を学ぶ」エゴマ収穫のお手伝い	金山町	学生15名 教職員1名
第6回	平成28年 1月23日（土） ～1月24日（日）	沿岸部の現状と復興に向けた歩みを知る	浪江町 富岡町 楢葉町	学生4名 教職員5名 他1名
第7回	3月5日（土）	「ひろの防災緑地 植樹祭」参加	広野町	学生12名 教職員2名

成 果

参加者は、実際に現地をおとずれ現状を知るとともに、交流をとおして地域の歴史や文化、復興への取り組みを学ぶことができた。また、地域のイベントのお手伝いをする中で住民との交流が深まるなど、イベントにも活気をもたらすことができた。「みらいバス」への参加が、学生や教職員にとって、それまで知らなかった各地域への興味関心を持つきっかけとなり、参加後

の活動や研究にもつながっている。

実施においては、各自治体をはじめ、企業やNPO等と連携をしたことにより、双方にとって学ぶ機会の創出と今後の関係をつくることができた。

課題と今後の展開

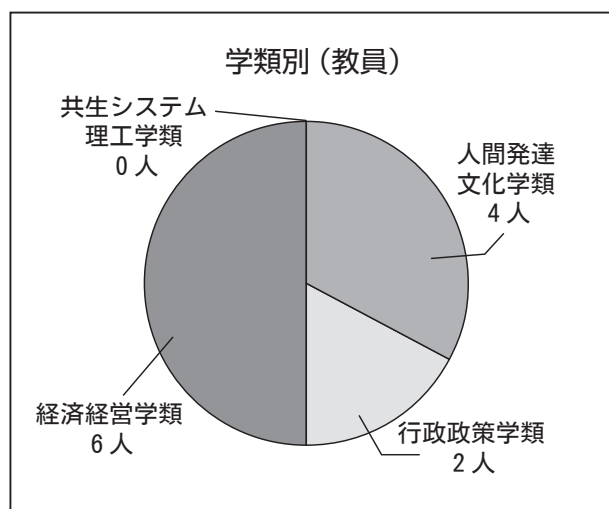
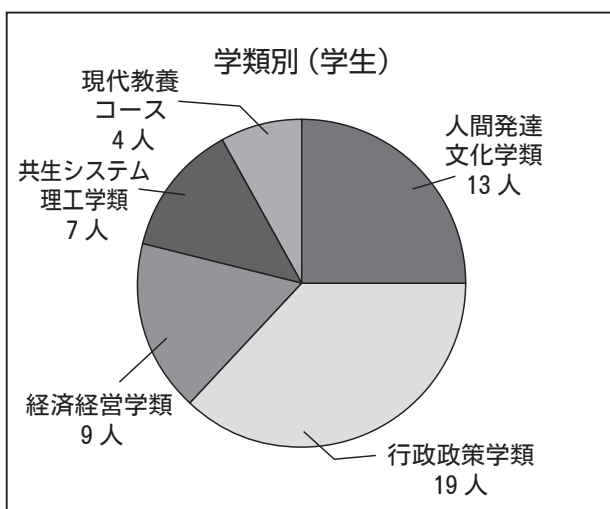
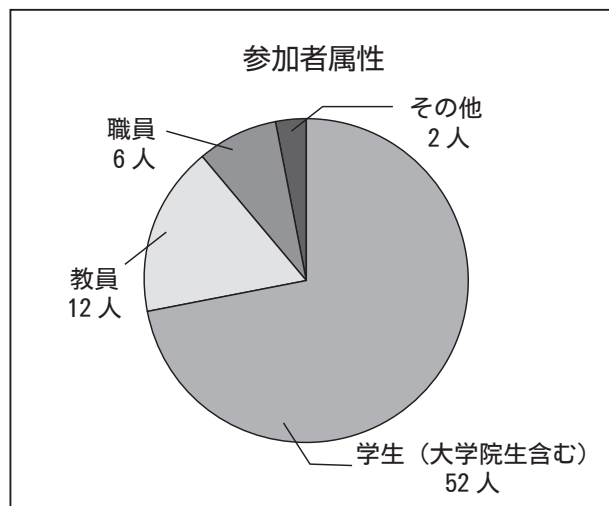
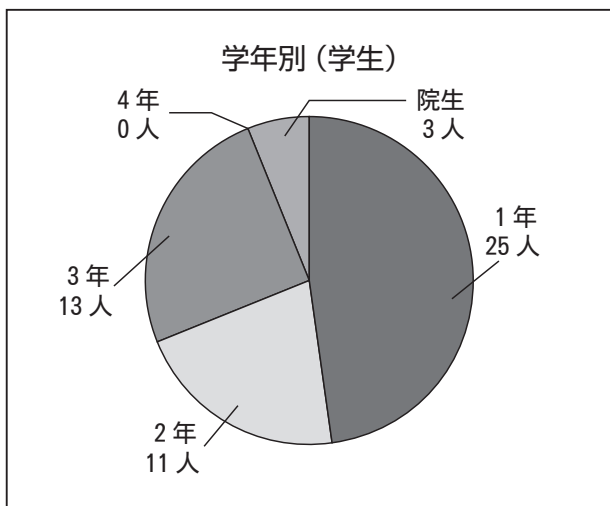
告知のタイミングや、実施時期などは学内スケジュールを考慮して行う必要がある。募集の案内を学生・教

職員全てに行ってはいるが、認識されていないことも多いため、どのように周知をはかるかを検討したい。教員同士の口コミを広げ、教員から学生への案内を増やすために、今後も教員の参加を少しずつ増やしていくよう力を入れることも課題である。

また、「みらいバス」で一度訪問して終わりではなく、継続的に多様な方法で地域を訪れるしつこみを、幅広い教員を巻き込みながら自治体と協議し検討を進めていく必要がある。

参加者属性

全7回参加者数：学生・教職員あわせてのべ106名



社会貢献①「みらいバス」実施報告

第1回みらいバス

川内村はるまつり（川内村）

地域の概況

東京電力福島第一発電所の事故により、全村避難を余儀なくされたが、平成24年4月に避難指示が解除された（一部地域除く）。現在住民の約6割にあたる1,615人が村で生活しているが、高齢化率約40%（平成27年6月現在）と、若い人たちが帰ってきていない状況である。

目的

東日本大震災と原子力発電所の事故によって、一時は途絶えてしまった400年以上の歴史を持つ重要無形民俗文化財「三匹獅子」を、復活・継承していこうと地区全体に取り組んでいる第一行政区。春季例大祭で行われる「三匹獅子舞」を現地でふれることを通じて、地域の歴史や文化への理解を深める。

概要



- ・日時：平成27年4月29日（水・祝） 7：15～17：15
- ・参加者：学生15名、教員3名、職員1名
- ・実施内容：高田島地区にある諏訪神社春季例大祭のお手伝い、三匹獅子舞の見学、住民との交流

参加者の声

- ・この祭りがどれほど地域の活性化につながっているのかということが、村のみなさんの様子を見て実感した。これからも川内村の活性化につながる活動に関わっていききたいと思った。
- ・改めて人間同士のふれあいの大事さを痛感した。震災・原発事故から一生懸命に復興に取り組む姿、その努力を周りの人にしっかり伝えていきたいと思った。

地域からの声

春季例大祭に来ていただいてありがとうございます。私たちの地区は、日ごろから外部の協力があって地区の行事が成り立ち、活性化されていると思っています。来ていただくのは本当に助かります。これからも大歓迎です。（第一区区長 遠藤 公明氏）

成果

「みらいバス」によって、学生をはじめとして教職員も地域に出向くきっかけとなり、今後につながる大きな収穫となった。

課題

今回は去年のフィールドワークでお世話になった川内村の高田島地区で実施したため、準備もスムーズに行うことができた。しかし、今後ほかの連携自治体で実施をする場合は、「みらいバス」の実施目的や方法など、事前打ち合わせなどを綿密に行うことが必要である。

社会貢献①「みらいバス」実施報告

第2回みらいバス

かつらお村民運動会（葛尾村）

地域の概況

東京電力福島第一原子力発電所の事故により、村全域が避難区域に指定され全村民が避難を余儀なくされている。現在は、葛尾村でのコミュニティを維持しながら村民の約6割が三春町で暮らしている。

目的

震災後、村民のつながりの強化や、子どもたちの運動会がにぎやかになるよう復活した運動会のお手伝いと参加をとおし、避難の現状や村の様子を知る。

概要

- ・日時：平成27年5月31日（日） 7：30～16：00
- ・参加者：学生16名、職員2名
- ・実施内容：「かつらお村民運動会」のお手伝い、運動会への参加

参加者の声

- ・震災前は子どもだけで運動会を行っていたと聞いたので、この運動会は震災があったからこそ生まれたきずなの象徴なのかなと感じた。
- ・地域のみんが1つになる姿にとっても感動したし、自分もその1人になりたいと思った。
- ・役場の方の行事や村に対する思いなど様々な話を聞くことができ、公務員で市役所志望の私としては、貴重な体験をすることができた。

地域からの声

みなさんにお手伝いいただいたことで、運動会の各係とも大変助かったと言っていた。また、学生の皆さんがリレーにも参加し盛り上げてもらったことで、見

ている方も楽しく、運動会は活気にあふれていた。特に子どもたちは、先生とも違う学生さんとふれあうことで心に残ったのではないかと思います。ご参加・お手伝いいただき、ありがとうございました。（葛尾村教育委員会 岩谷 一登 氏）

成果

役場の方から、例年よりも片付けも早く終わって助かったとの声をいただいた。運動会を若い力で盛り上げることができたともに、人手不足の部分において貢献をすることができた。

課題

運動会の手伝いだったことから、住民との直接話すようなことが少なく、交流を深められる場を設けることも必要だと感じた。昼食では、各自住民の輪の中に入り昼食をとってもらったが、中には、輪の中に入ることが難しかった参加者もいたため、サポートをする必要があった。



社会貢献①「みらいバス」実施報告

第3回みらいバス

五感で楽しむ東和の夏 ～住民主体の活動を学ぶ～（二本松市）

地域の概況

二本松市東和地区は、東日本大震災後も地域再生や有機農業の活動において全国的に高い評価を受けている地域。遊休農地を開墾しての野菜作り、UIターン者の就農支援なども積極的に行っている。

目的

農業体験をとおして、東和地区における住民の主体的な活動を学ぶ。

概要

- ・日時：平成27年7月4日（土） 8：30～16：00
- ・参加者：学生16名、教員2名、職員2名
- ・実施内容：大豆植え、住民と昼食（カレー・バーニャカウダ）づくり、住民の方々による音楽LIVE鑑賞、大豆についての講話、「ふくしま農家の夢ワイン」見学とワイナリーづくりにおける講話



※学生の主体的な活動を「ふくしま未来学」として支援するために、スタ☆ふく（福島大学生で構成されたスタディツアーを企画運営する団体）と協働した。

学生からの声

- ・ワイナリーの齋藤さんのお話を聞いて、震災後の大変な状況に負けずにやりたいことを全力でやる姿勢に感動した。
- ・後継者不足などまだまだ解決しなければならない問題が多く存在していることを肌で感じた。

地域からの声

この機会がなければ出会えないであろう福島大学のみなさま・地域の方々と大豆の苗植えに取り組み、とても良い時間を過ごした。畑仕事を通して初対面でも自然に交わされる会話や笑顔、目標に向かって協力し、達成するという時間に幸せを感じることができた。「みらいバス」、素敵なお縁を繋ぐバスとして走り続けてください。（市民活動団体：ハーモニー 片平正子 氏）

成果

スタ☆ふくの学生が東和との良いつながりがあったことで、地域の方々が快く迎え入れてくれ、参加者がすんなり地域になじむことができる企画を実施することができた。さらには、共同実施だったことで、双方共に新たな学生との接点をつくることができた。

課題

学生との協働実施の場合、COCと学生の業務の役割分担をより明確にし、学生の主体性を引き出すとともに、学生の活動をより幅広く周知していくことが必要である。

社会貢献①「みらいバス」実施報告

第4回みらいバス

相馬野馬追 ～千年の歴史とつながる 想いを間近に感じよう～（南相馬市）

地域の概況

南相馬市は、東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響により、震災直後に警戒区域の20kmライン、緊急時避難準備区域の30kmライン、30km圏外へと3区分され、鹿島区のほとんどは30km圏外にあたる。後日、区域が再編されたが、現在も小高区と原町区の一部は居住が制限されている。

目的

国の重要無形民俗文化財として指定されている「相馬野馬追」は、平成23年にも鎮魂と地域の復興を願い、規模を縮小したものの例年通り開催された。震災後もその伝統を絶やさず続けてきた「相馬野馬追」の手伝いをするなかで、住民の野馬追にかける思いや、伝統の継承について学ぶ。

概要

- ・日時：平成27年7月25日（土）7：15～17：15
- ・参加者：学生4、教員3名、職員1名
- ・実施内容：北郷本陣での手伝い（来賓接待・安全確保・設備撤去作業）と観覧



参加者の声

- ・馬の迫力と地域の方々のあたたかい支援がとても印象に残っている。野馬追を見て南相馬のイメージが変わった。
- ・以前と変わらない活気があり、復興も進んでいないわけではないと思った。
- ・地域のみなさんで創り上げ、守ってきた神事で感動した。

地域からの声

私が担当している鹿島区での相馬野馬追祭では、ボランティアの受け入れ経験がなく、初の試みでした。しかし、ほかの職員から「みんな一生懸命で助かった」「来年も来てほしい」という声を聴くことができました。雨が降る中手伝っていただいたこと、ボランティア受け入れという経験をさせていただいたこと、皆さんに感謝しています。（南相馬市 鹿島区産業建設課 商工観光係 係長 佐伯 雄一 氏）

成果

人員不足だったということもあり、とても喜んでいただき、また今後につながる関係を作れたと感じている。今回の「みらいバス」で相馬野馬追を体感したことは相馬野馬追や南相馬市に興味をもつきっかけになった。改めて、現地を訪れるということの意味について感じる事ができた。

課題

お手伝いをとおして交流はとれたが、深い話まではできない。「みらいバス」の参加だけでも地域への興味をもつきっかけとはなるが、それだけでなく当日にどのような学びを参加者に提供できるかを考えたい。

社会貢献①「みらいバス」実施報告

第5回みらいバス

高齢化社会における地域再生を学ぶ ～エゴマ収穫体験～（金山町）

地域の概況

金山町は、高齢化率が59.7%（平成27年12月現在・福島県データ）と県内で一番高い地域。少子高齢化が深刻ななか、健康長寿をめざし、純度が高く質がよい「エゴマ」の生産と販売をしている。

目的

エゴマ収穫体験を通して、超高齢化社会の実態を学び、「地域再生」にむけた取り組みを考える。

概要

- ・日時：平成27年10月12日（月・祝） 7：10～18：30
- ・参加者：学生15名、教員1名
- ・実施内容：エゴマ収穫体験（刈り取り・脱粒、とうみによる選別等）、「奥会津金山エゴマの会」の方々と交流、玉梨とうふ茶屋で金山町の食文化に触れる。



学生からの声

- ・金山町は何もないというイメージを持っていたが、エゴマの他魅力的な潜在資源があることを知った。
- ・地元の人だけではなく、私たち若者が積極的に現状に向き合い、考え、行動する必要があると思った。

地域からの声

金山町は、高齢化率が59.7%と福島県内で最も高齢化率が高い町である。特に農作業は、機械作業だけではできない作業もあり、エゴマは、手作業が多く、高齢者には、負担が多い農作物である。今回、学生が作業の手伝いに来ていただいた事により、高齢者の負担軽減、集落の活性化に繋がったと感じている。今後とも大学と連携した取組をお願いしたい。（金山町役場産業課 五ノ井輝夫氏）

成果

「ふくしま未来学」として、新たな自治体と関係性を構築することができた。刈り取りなどの作業において大学生の飲み込みが早く、大学生が担う役割への期待と信頼が生まれたと感じる。また、学生たちは、エゴマ収穫体験をとおして、高齢化に伴う農作業の大変さや持続性の問題を、データとしてだけでなく体感することができた。

課題

若者との交流や若者の定住を見据えた機会づくりであったが、継続的に行っていくためにも町と協議しながら、多様な関わり方で実施できる方法を考えていく必要がある。

社会貢献①「みらいバス」実施報告

第6回みらいバス

ふくしまの沿岸部って今どうなってるの？現状と復興におけた歩みを知る (浪江町・富岡町・楢葉町)

地域の概況

東京電力福島第一原子力発電所事故により、現在も浪江町と富岡町は町内全域が避難指示区域に指定されている。楢葉町は平成27年9月に避難指示が解除されたが、町は「帰町目標」を平成29年春に設定しており、現時点で帰町した住民は現時点で6%ほどにとどまっている。政府は、帰還困難区域を除いた全ての区域の避難指示を平成29年3月までに解除し、帰還を可能にしていけるよう復旧加速に取り組む指針が示されているが、被災状況が各町村で異なることから、一言で「被災地」とくれない多様な状況や課題が生じ、復旧・復興への取り組みは大きく異なっている。

目的

福島第一原発20km圏内にある沿岸部の各自治体を訪れ住民と交流する中で沿岸部の現状を理解する。

概要

- 日時：平成28年1月23日(土) 7:45～
1月24日(日) 18:00
- 参加者：学生4、教員5名、他1名
- 実施内容：
 - ①浪江町
 - 町めぐり(浪江駅、大平山等)
 - 「NPO法人Jin」訪問(うどん作り、代表の話)
 - ②富岡町
 - 町めぐり(富岡駅、夜ノ森、観陽亭等)
 - ③楢葉町
 - 「JAEA 楢葉遠隔技術開発センター」見学・バーチャル体験
 - 町めぐり(天神岬、竜田駅等)
 - 「木戸川漁業協同組合」訪問
 - 高久第九応急仮設住宅訪問(役場職員の話、住

民との交流)

参加者の声

- ・中学・高校時代に訪れたことのある場所の現状を見て、5年経った今でも進んでいない(遅れている)ことにショックを受けた。3区域が混在する町としての対応の難しさ、住民の方の分断、まだまだ原子力災害は「収束」しないのだと感じた。原子力災害を自分事としてとらえ、もっと深く考えていきたい。
- ・来年度もぜひ、沿岸部への計画を立てて欲しい。1度だけでなく、2度、3度と足を運ぶことが大切であると感じたので、また1年後ぜひ、どう進んでいるのかを見たい。
- ・今回のツアーを通じて、思いもよらなかった問題を実感し、その解決には何が必要であるのかを考えるようになり、すごく意義がある訪問であった。同じ福島県民であっても、普段見られないことであり、想像すらできなかったことである復興作業に尽力する多くの方の様子、町の至る所にある原発事故と津波の痕跡などを見て、完全復興までの課題と福大の役割に関して考えることができた。

地域からの声

〈浪江町〉

このたびは、浪江行き、みらいバスにご乗車いただき、誠にありがとうございました。ご参加いただいた学生の皆様、また教職員の皆様におかれましては、震災から5年が経過し、未だ誰も住んでいない当町の現状をご覧いただき、様々な想いを抱かれたかと思えます。「正解のない、数え切れないほどの課題」。その解決に向けて、引き続き皆様とともに、「終点のない、みらいバスに乗って」福島の未来を考え続けていけたらと思っております。今後ともよろしく願いいたします。(浪江町役場 復興推進課 松本 孝徳氏)

〈富岡町〉

今の富岡町を案内していくなかで、当然分かっているだろうと思っていたことが知られておらず、町民以外への発信の難しさを実感しました。町民への情報発信の媒体は決まっていますが、対外的な発信は決まったがありません。積極的に町の現状を発信するため、町としての広報の方向性、発信頻度、バランスを改めて考える機会となりました。また、直接町を見てもらうことで感じてもらうこと、考えてもらうことがたくさんあるのだと感じました。(富岡町役場 総務課 総務係 係長 堀川 新一 氏)

〈榎葉町〉

今回の町内めぐりでは「また会いに来たい」と思っただけのよう、町民の想いに触れることができる内容にしました。参加者の方には実際に見て聴いて感じ考えたことを県内外に発信してもらいたいです。今後も「知る」機会を増やし、県内の大学だからこそできる町民の生活に寄り添う継続的な活動が生まれることを期待しています。(一般社団法人ならはみらい 西崎 芽衣 氏)

▼浪江町



成 果

3つの町を巡り自治体ごとの比較ができたことにより、町ごとの課題を感じる事ができたと同時に、復興にむけて共通した課題が沿岸部の自治体にはあるのだということを確認することができた。また、視察、交流、話を聞くということをとおして、スタディツアーとしての地域との関わりが一方にならず、参加者だけではなく、町民や自治体職員にとっても互いに良い体験となった。自治体職員からは、外部の人たちと話すことで職員自身もまちの課題に改めて向き合い、整理をする時間になったという声をいただいた。

課 題

実施日は季節や学内スケジュールとの調整をし、宿泊を伴う場合はさらに早い周知を行う必要がある。次回は、開催時期の見直しにより多くの方に参加していただきたい。

▼富岡町



▼榎葉町



社会貢献①「みらいバス」実施報告

第7回みらいバス

ひろの防災緑地 植樹祭（広野町）

地域の概況

広野町は、原発事故後に「緊急時避難準備区域」に指定され、自主避難勧告を出した地域。現在は人口約5,000人のうち約半数が帰町している。住民数をはるかに超える廃炉・除染作業員が増加するなどの社会状況が生じ、「作業員の方々と共存」の課題もある。

目的

「ひろの防災緑地 植樹祭」への参加や、作業員宿舎を経営する方や子育て世代の母親からお話を伺うなどとおして、「住民が安心安全に暮らすまち」とは何かを考える。

概要

- ・日時：平成28年3月5日（土）7：20～18：30
- ・参加者：学生12名、教員1名、職員1名
- ・実施内容：「ひろの防災緑地植樹祭」への参加、作業員宿舎を経営する方や子育て世代の母親からお話を伺う、広野町内めぐり（広野町みらいオフィス、ひろのてらすなど）

学生からの声

- ・自分たちのような若手の力に期待をし、必要としている方々がたくさんいることに気づいた。これからもこういった企画に参加をして、自分の力を必要としている方々の力になりたい。
- ・「作業員に対して悪いイメージを持っていたら、広野町に帰りたと思う人が減ってしまう」という意見にとっても共感した。作業員に対する考え方が変わった。
- ・もう自分の町の道路は直っているし、復興って終わり？と考えていたけど、今回参加をしてみて、現在進行形で頑張っている人がたくさんいることを知っ

て、考えるべき問題があると思った。福島の子供としてそれを知って考えるようになりたいと思った。

成果

植樹という形で、町民や企業など、地域が一体になって取り組む復興事業に携われたことで、多くの人々の力や想いで復興が進められていることを参加者は体感することができた。

また、立場の異なる町民から実際にお話を伺ったことで、メディアで報道される作業員のイメージと現状は異なると感じることも多くあり、参加者は多面的に物事を見つめ、町の状況を理解していく必要があることを学ぶことができた。

課題

ひろの防災緑地や植樹祭がつくられる過程に関係者の方々からお話を伺うなどの要素を組み込めるとなおよかった。それとおして、復興に向けて町の整備を進める難しさや課題を学び、他地域の復興や次の災害への教訓に結びつけられるのではないかと考える。



「ふくしま未来学」出前講座 実施報告 ～いのちとくらしのデザイン塾～

目 的

震災から4年が経過し、被災地では原子力災害にもなう影響がコミュニティに大きく影響をもたらしている。避難指示が解除され、帰還が始まる地域がある一方、帰還困難区域などにおいては長期避難が予想される。今後は、被災者の生活再建にむけてそれぞれの支援者が被災者を中心におきながら、ネットワークの構築や役割や機能の確認・分担、さらには支援者自身のスキルアップも今以上に求められてくる。そこで、被災地の大学として、被災者の方々の生活再建と地域の再生をめざし、各機関の支援者を対象にした研修プログラム（出前講座）を開催した。

概 要

- ・対象者：コミュニティ交流員、生活支援相談員、復興支援員など、各回約40名、のべ180名
- ・日程 各回10：00～15：00
第1回 10月20日（火） 第2回 10月27日（火）
第3回 11月11日（水） 第4回 11月24日（火）
第5回 12月8日（火）
- ・会場：福島県男女共生センター（第1回～3回）
南東北総合卸センター（第4回、5回）
- ・主催：ふくしま未来学推進室
- ・共催：特定非営利活動法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会、一般社団法人ふくしま連携復興センター、福島県

・後援：福島県社会福祉協議会、南相馬市、浪江町、富岡町、双葉町

※講座に参加していただいた方には、修了証をお渡ししました。

成 果

被災者を支援している支援者の横のつながりができたことが、大きな成果である。講義の中からは、支援者も支えられていること、支援者の心と体の健康、つながりづくり、男性の役割づくりが大切であると感じた受講生が多かった。また、日々の自分の仕事をふりかえられたこと、他職種との交流ができたこともあげられており、今後問題や課題があった場合、相談する先が増えたという声もあった。

課題と今後の展開

この研修を実施することにより、各支援者の横のつながりを構築し、現場での連携・実践がしやすい環境をつくることができたことが大きな成果である。これまで福祉等の仕事に就いていなかった人と、これまで福祉の仕事をしてきた人と混在していることから、講座のレベル、どのような講座が一番適しているかが計画段階で課題であった。来年度の開催を望む声もあり、来年度開催するのであれば、今年度の内容をさらにステップアップした講座を考えることが必要になる。

講座の様子

第1回 10月20日 (火)	【講師1】丹波 史紀 (福島大学行政政策学類准教授)	【テーマ】支援者同士の目線あわせ ーその人なりの選択ができるようにー
	【講師2】富岡町3・11を語る会	【テーマ】震災から現在までの住民の思いを知る
初回のため、自己紹介を行い始めた。被災者の支援を行う支援者は、職種は違っていても支援することの意味や目的は同じである。その目線あわせと、被災者の避難から現在に至るまでの心情を座学で学んだ。		



第2回 10月27日 (火)	【講師1】稲垣 文彦 氏 (公益社団法人 中越防災安全推進機構)	【テーマ】なぜ連携することが必要なのか ー支援者間の円滑な連携についてー
	【講師2】遠藤 智栄 氏 (地域社会デザイン・ラボ)	【テーマ】他職種との連携や情報共有をしやすくする人的つながりづくり
2つの講義をとおして、連携することが目的ではないこと、グループワークを通して、職種は違っていても悩みは同じであることを共有し、今後活かせる「つながり」づくりを行った。		



第3回 11月11日 (水)	【講師1】三澤 寿美 氏 (東北福祉大学保健看護学科教授)	【テーマ】事例検討ーこんなときどうすればよいか課題発見の目
	支援者の傷つきや、支援者の健康、チームということを学んだ。午後からは、実際に現場で困った事例をもとに、グループで事例検討を進めた。	



第4回 12月4日 (火)	【講師1】鈴木 典夫 (福島大学行政政策学類教授)	【テーマ】 ボランティアと専門職の協働、「いるだけ支援」の取り組み
	【講師2】天野 和彦 (福島大学うつくしまふくしま未来支援センター客員准教授)	【テーマ】 交流の場の提供と住民参画
	2つの講義に共通して、どちらも支援とはなにか、いのちを守ること、なぜコミュニティ形成が必要かということ学んだ。	



第5回 12月8日 (火)	【講師1】池田 昌弘 氏 (全国コミュニティライフサポートセンター理事長)	【テーマ】 住民同士の支え合いを基盤にした地域づくり
	全5回のふりかえり	午前は、住民同士の支え合いを基盤にした地域づくり、居場所づくり、ニーズの発見、そのニーズにどう取り組んでいくかを学んだ。午後は、全5回のふりかえりを、まずは様々な主体の混合チームで行い、その後講座で学んだことを明日から活かしてもらうため、主に同じ所属のチームで話し合ってもらった。



参加者の声 (アンケートより)

- ・ 支援とは何なのかを考えるよい機会になりました。人を集めるイベントの企画に目が行きがちだったが、なぜそれが必要かを考える事ができた。地域との融和させる事の必要性を感じた。
- ・ 受講回数を重ねるにつれ、東日本大震災においての、他県との相違点、これまでのどの震災とも違う、県

内の避難者の立場の違いに、接し方や関わり方の難しさを感じた。また、ハード面を整えるだけの行政のあり方についても考えさせられた。

- ・ 支援とは何なのかを考えるよい機会になりました。人を集めるイベントの企画に目が行きがちだったが、なぜそれが必要かを考える事ができた。地域との融和させる事の必要性を感じた。

社会貢献③ 高校生向けシンポジウム 実施報告

高校生向けシンポジウム「福島学×ふくしま未来学」 ～本当の福島を知ろう～ オープンキャンパス「ふくしま未来学」パネル展示

目 的

オープンキャンパスにて高校生および保護者に「ふくしま未来学」の取り組みを広く周知するために、連携自治体に立地している高校の高校生を中心としたシンポジウムを開催した。「ふくしま未来学」では、まずは地域を知ることが目的としているが、高校生には福島の現状をワークショップ形式で学んでもらった。そのほか、パネル展示として、「ふくしま未来学」のブースを設け、高校生および保護者、地域の方々に本取り組みを広く紹介した。

シンポジウム

〈概 要〉

- ・日時：平成27年 8月 9日（日） 11：00～12：15
- ・場所：福島大学 M講義棟 3階 AV教室
- ・参加者：約30名

本学の開沼先生が震災後、全国各地で実施している「福島学」を参加型のワークショップ形式で学んでもらい、約30名の高校生および保護者、高校の教員が参加した。また、昨年度の「むらの大学」受講生が、フィールドワークの内容説明や取り組みを発表し、被災地をはじめとした地域での活動が本学でできること、成長できることをPRした。



「ふくしま未来学」のブースでは、高校生および保護者、地域住民に本取り組み、連携自治体について紹介し、約300名の来場者があり、興味を持ってもらうきっかけを作った。

〈実施の様子〉

まずは、開沼先生の用意した「福島を知るための15の問い」に個人で取り組んだ。その後、グループに分かれ意見を共有し、各グループが発表。県内に住んでいても、被災地の現状や、正しい数字が分からないことが多いことに気づかされ、「福島に住む自分たちが、正しい知識を持ち、メディアや県外に情報を発信していく」ことの重要性を学んだ。

〈参加者の感想〉

- ・入学できたら受講してみたい。地域密着型の活動にとっても興味が湧いた。（茨城県）



- ・自分が福島県民にも関わらず全く分かっていなかった。(福島県)
- ・クイズを通して学べた。いろんな方面から見た福島の実態が勉強できた。(宮城県)

パネル展示

〈概要〉

- ・日時：平成27年8月9日(日) 10:15~14:55
- ・場所：学生会館2階小集会室1号
- ・来場者：約300名

「ふくしま未来学」の取り組みを「教育」「研究」「社会貢献」にわけてパネル展示をすると共に、連携自治



体の広報誌や特産品なども展示した。また、これまでTV放映された映像を会場入り口にて流した。

〈実施の様子〉

会場では、「むらの大学」受講生やふくしま未来学推進室委員の教員が説明を行った。「むらの大学」受講生が、授業を受けて気づいたことや学んだことを自分たちの言葉で話すことで、高校生にも分かりやすく伝わった。また、12の連携自治体の特産品・広報誌なども展示し、高校生は自治体の取り組みについて関心を寄せていた。

成果

シンポジウムとパネル展示をとおして、高校生のみなさんが少しでも「ふくしま未来学」に興味を抱き、進路を決める選択肢の一助となることができた。また、シンポジウム、パネル展示ともに、「むらの大学」の昨年度と今年度の受講生が高校生に、自分の言葉で説明し、伝えることができていたことも成果だといえる。

課題と今後の展望

さらに多くの高校生に「ふくしま未来学」を知ってもらうために、来年度は模擬授業をすることも考える必要がある。「ふくしま未来学」ブースは、高校生や保護者が多く行き交う場所だったこともあり、盛況であった。内容をさらに充実させ、来年度も継続する予定である。

【小括】社会貢献事業の課題と今後

ふくしま未来学推進室委員

長 橋 良 隆

(共生システム理工学類 教授)

今年度に実施した社会貢献事業は、「出前講座」、「みらいバス」、「オープンキャンパス出展」であり、これらの事業を平成27年度の計画通りに、全て実施することができた。

「出前講座」では、被災者の方々の生活再建と地域の再生をめざし、各機関の支援者を対象にした研修プログラムを実施した。対象を各機関の支援者に絞り、被災者の生活再建にむけたネットワークの構築、支援者の役割や機能の確認・分担など、支援者自身のスキルアップに資する内容とした。コミュニティ交流員、復興支援員、生活支援相談員などの参加があり、好評であった。

「みらいバス」では、福島大学の学生と教職員が地域

住民と共に、地域の伝統行事や活動を協働することを通じて、地域が有する有形・無形の貴重な財産を再認識できた。また、「スタ☆ふくプロジェクト」という福島県内各地でスタディツアーを企画・運営している福島大学学生による団体とともに事業を実施し、学生の主体的な活動を「ふくしま未来学」として支援した。

「オープンキャンパス出展」では、「ふくしま未来学」の取り組みについて、高校生向けミニシンポジウムとパネル展示で紹介した。オープンキャンパスに訪れた高校生（や保護者）の多くが立ち寄り、「ふくしま未来学」の取り組みを大いにアピールすることができた。

福島大学と地域との連携あるいは高校（生）との関わりなど、「ふくしま未来学」の事業を通じて得た実体験・人的交流・様々な情報は大変有意義で貴重なものであった。事業の計画と実際の運営経験を積み重ねつつ、連携先との具体的な協力方法や継続的に事業を実施できる体制や運営方法の検討などが今後必要となろう。



連携自治体との取り組み



- ふくしま未来学 連携自治体担当者会議
- 連携自治体との協力事業

ふくしま未来学 (COC) 連携自治体担当者会議 実施報告

目 的

12の連携自治体との連携・協力において事業を展開する中で、「ふくしま未来学 (COC事業)」の趣旨を自治体に十分に理解していただくとともに、自治体との意見交換をとおして、より一層の協働をはかる。

実施内容

第1回 連携自治体担当者会議

- ・日時：平成27年5月11日(月) 13:30~15:00
- ・場所：福島大学 行政政策学類棟 2階 大会議室
- ・出席者：

福島県 企画調整部 政策官 松崎 浩司氏、他2名
福島市 企画経営課 課長 野田 幸一氏、他1名
伊達市 教育部学校教育課

参事兼指導係長兼管理主事 二階堂康男氏
南相馬市 復興企画部 企画課

復興推進係 副主査 武山 健蔵氏
双葉町 復興推進課 主任主査 橋本 靖治氏
大熊町 教育委員会 教育長 武内 敏英氏
楡葉町 復興推進課 復興推進係

主事 三浦 寛己氏
浪江町 復興推進課 復興企画係

係長 松本 孝徳氏、他1名
富岡町 総務課 課長 伏見 克彦氏

川内村 総務課 企画政策係 係長 三瓶 守衛氏
葛尾村 総務課 復興対策係 主査 本多 貴之氏

・内容：

1. あいさつ
(ふくしま未来学推進室 室長 神子 博昭)
2. 「ふくしま未来学 (COC事業)」概要説明
3. 平成26年度 連携自治体における地域活動について
4. 平成27年度「ふくしま未来学」の取り組みについて

5. 各自治体から (要望、課題など)

6. 意見交換



第2回 連携自治体担当者会議

- ・日時：平成28年2月5日(金) 13:30~15:00
- ・場所：福島大学 経済経営類棟 2階 大会議室
- ・出席者：

福島県 企画調整課 主任主査 中村 敬氏
福島市 政策推進部 企画経営課 企画調整係
主査 鈴木 耕氏

伊達市 伊達市教育委員会 学校教育課指導員
丹治 陸雄氏

南相馬市 復興企画部 企画課 復興推進係

係長 矢吹 喜彦氏
大熊町 企画調整課 課長 幾橋 功氏

楢葉町 復興推進課 主事 三浦 寛己氏、他1名
浪江町 復興推進課 復興企画係

係長 松本 孝徳氏

葛尾村 総務課 復興対策係 主査 本多 貴之氏

双葉地方町村会 事務局長 松本 広行氏

・内容

1. あいさつ
2. 自己紹介
3. 平成27年度の取り組みについて（連携自治体との協働の取り組み等）
 - (1) 概要説明、平成27年度の取り組みについて
 - (2) 教育
 - ① 「むらの大学」南相馬市・川内村での活動報告
 - ② 新規開講「ふくしま未来学入門」について
 - (3) 研究
 - ① 地域志向教育研究について
 - ② 報告
「原発事故に伴う避難指示区域の歴史文化遺産の保全と継承」行政政策学類 徳竹 剛准教授
 - (4) 社会貢献
 - ① 「みらいバス」実施報告
 - ② 出前講座について
4. 平成28年度の取り組みについて
 - ① 全体概要
 - ② 「むらの大学」について
5. 意見交換（各自自治体から要望、課題）
6. アンケートご協力をお願い
7. あいさつ



成果と課題

第1回では自治体の方に、「ふくしま未来学」の取り組みについて知っていただく機会となった。その中で自治体からいただいた要望をもとに、「みらいバス」で地域に赴く機会をつくることができた。第2回では、各自自治体の協力によって学生が学ぶ機会の創出と大きな成果を上げることができたことを報告し、来年度の事業展開に対して自治体の方々から前向きな意見をいただくことができた。

「むらの大学」でフィールドワークを実施している南相馬市・川内村以外の自治体においても、今後、事業を展開していける可能性が広くあることを確認することができた。次年度は、各自自治体の地域課題や要望に添い、より現場の状況に合わせた取り組みを考えていく必要がある。

連携自治体との協力事業 実施報告(1)

広野町 「国際フォーラム 『被災地・広野町から考える』」

地域概況

広野町は、東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故を受け、緊急時避難準備区域に指定された町である。平成24年3月の避難指示解除後に町民が帰還し、現在は人口約5,000人のうち約半数が帰町している。

目的

「むらの大学」の実習や広野町スタディツアーで学んだことの発表を通して、町民と大学生でふたばの未来を考える。

概要

9月14日(月)～20日(日)にかけて広野町主催で行われた、幸せな帰町と被災地全体の復興に向けて考える「国際フォーラム」の中で、「むらの大学」の受講生が地域実践学習で学んだことについて発表をした。

- ・日時：9月19日(土) 10:00～12:00
- ・発表者：学生6名
(「むらの大学」受講生1年生3名、2年生3名)
- ・聴講者：約60名(海外招聘者、住民、町外の復興支援者、双葉郡役場職員など)
- ・発表内容：大学生から見た「まちの魅力と課題、私たちにできること」を、南相馬・川内村・広野町それぞれ地域別にプレゼンテーションした。

※参加学生たちは、8月18日(火)に国際フォーラムにむけた事前学習として、「広野町スタディツアー」を実施した。

発表学生からの声

- ・聴講者から鋭い質問があり、普段から様々なアンテナをはって考えていかなければと思った。
- ・地域で活動するにあたって大学生は、住民の方々が活気溢れるような手助けをしているという意識を持

つことが大事だと教わることができた。

地域からの声

発表当日のアンケートから下記のような声をいただいた。

- ・かなり難しい課題に大学生が取り組んだことは、今後の被災地復興の大きな基盤となるものと考えます。(広野町・40代男性)
- ・広野町でも川内村、南相馬市のように、学生さんが2週間滞在して関わられる体制が整えられればよいと思う。(広野町役場・50代女性)

成果

外部の人間である学生が被災地に入って素直に感じることは何か、町の復興に対する大学生の関わり方のひとつの事例を示すことができた。また、町民や海外招聘者らから直接感想や質問をいただき、学生にとって貴重な学びの場となった。

課題

今後も町民と大学生で地域の未来を考えていくにあたり、町民とのつながりづくりを力を入れていく必要がある。さらに、将来的に可能であれば、広野町をはじめとする双葉郡地域で「むらの大学」を横展開していく。



連携自治体との協力事業 実施報告(2)

南相馬市 「みなみそうま復興大学」

地域概況

南相馬市は旧鹿島町、旧原町市、旧小高町が合併して平成18年に誕生した。東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響により、震災直後に警戒区域の20kmライン、緊急時避難準備区域の30kmライン、30km圏外へと3区分され、後日区域が再編されたが、現在も小高区と原町区の一部は現在も居住が制限されている。

「みなみそうま復興大学」と「ふくしま未来学」の関わり

震災後、南相馬市ではさまざまな大学や団体が市内で活動を行っている。「みなみそうま復興大学（以下、復興大学）」は、そうした大学と地域住民・団体が交流を行いながら、震災からの復興に向けた活動をする拠点として平成27年6月に設立された。「ふくしま未来学」においても、地域に根ざした活動を行うため、今年度から復興大学を活用するとともに、市との協働企画実施に向けて打ち合わせなどを行っている。

目的

学生が復興大学を拠点として活動することで、市民の復興大学に対する認知を広げる。また、市を訪れる人と市民がともに学ぶ場所として復興大学が広く活用されるよう働きかける。

実施内容

学生が「むらの大学」などのフィールドワークを行う際の拠点として、原町駅前に開設されたシェアオフィスを利用した。その後も、行政・市民とともに打ち合わせを重ね、今後の利活用に向けた協議を行っている。

- ・ 6月20日(土) 復興大学開所式、開所記念シンポジウム出席
- ・ 8月21日(金)～9月3日(木)「むらの大学」フィー

ルドワークにおいて、振り返りやグループワーク等にて利用

※学生が復興大学を利用した感想と活用アイデアをまとめ、市に提出

- ・ 10月15日(木) 復興大学 利活用打ち合わせ
- ・ 11月3日(火・祝) 復興大学を利用し、「あきいち」にて「むらの大学」活動の様子などを展示
- ・ 11月5日(木) 復興大学 利活用打ち合わせ
- ・ 12月5日(土) 復興大学 利活用打ち合わせ
- ・ 2月6日(土)
「学びあいの場のづくり方」ワークショップ参加

地域からの声

大学が南相馬市をキャンパス（フィールド）とした活動を支援するため、市は今年度、拠点施設（宿舎・事務所等）を整備し、利活用いただきました。震災や原発事故によって引き起こされた地域の課題解決のため、外部の新鮮な視点を生かし、積極的に活動していただきました。今後も南相馬市における継続した調査、研究を期待するとともに、市民や地域を動かす新しい風となるよう、今後の活動に期待しています。引き続き、復興大学を通して、市民との対話や交流を積極的に行うとともに、外部の新鮮な視点を十分に生かし、市の復興につなげていただきたいと思います。（南相馬市 復興企画部 企画課復興推進係 係長 矢吹 喜彦 氏）

成果

「むらの大学」のフィールドワーク期間中、振り返りやグループワークの拠点として実際に利用し、学生からも今後の利活用についてのアイデアが出され、次年度の活動の企画も生まれた。復興大学の利活用をとおして、市や市役所職員の方と協働でプログラムをすすめることができ、今後につながる関係性をつくることのできた。

課 題

復興大学を利用するにあたり、周辺にある商店や地域住民等への周知が十分とはいえなかった。次年度は、活動への理解をしていただく働きかけをし、交流や地域の活性化を考慮したフィールドワークのプログラムを周辺地域の方とも考えながら共にすすめたいと考える。また、それにより復興大学を近隣住民に認知していただけるような取り組みをしていきたい。



連携自治体との協力事業 実施報告(3)

福島市 「ずっと福島市応援プロジェクト」

地域概況

福島市は、人口28万人の中規模都市で県庁所在地でもあり、県内の行政・産業・観光を担う重要な地域。一方、文教施設も少なくないことから、人口減少や高齢化、産業構造の変化が見えにくい地域である。

目的

若者が将来的に福島市に定住・定着することをねらいとし、学生の目線で「地域を再発見」することをとおして、福島市に暮らす意識を育む。

※COCはこの事業における広報の協力、各回の学生指導およびプロジェクトの運営に関する助言等を丹波実施責任者が担った。

概要

福島市が主催する、「ずっと福島市応援プロジェクト」に学生が参加をした。

- ・日程：
 - 7月26日(日) オリエンテーション
 - 8月10日(月) 市内観光地フィールドワーク (桃狩体験、ABE果樹園、土湯温泉)
 - 企業訪問フィールドワーク ((株)日進堂印刷所)
 - 8月19日(水) 企業訪問フィールドワーク ((株)福島製作所、(株)アポロガス、協三工業(株))
 - 8月24日(金)、9月10日(月) グループ学習
 - 9月30日(水) 小林香福島市長とのタウンミーティングで成果発表
- ・参加学生：1、2年生29名 (福島大学生18名、福島学院大学、福島学院大学短期学部)

参加学生からの声

- ・私は福島に残りたいと思っていたが、どんな企業があるか分からなかったなので、とても良い機会だった。
- ・今回のことを機に福島市のまちづくりや自分自身の

ものを考える力を鍛えるため、何らかの形でまた色々な活動に参加していきたい。

地域からの声

今事業の実施により、参加者の福島市への興味関心が高まり、将来的な定住、定着に対する意識の変化も見られた。また、学生の市政参画への関心の高さがうかがえ、事業を通して学生同士の大学を超えたネットワークが構築されたことにより、今後、様々なまちづくりへの参画の可能性が広がった。(福島市政策推進部企画経営課)

成果

すべての学類から参加学生を募ることができた。訪問した先では福島ならではのユニークな取り組みが行われており、学生たちは福島市でこれまで知り得なかった特色のある取り組みを聞くことができた。成果報告の中には、「自分たちなりにできること」を考えた提案もあり、学生の主体形成をしていく機会となった。

課題

地域振興にあたり、定住・交流人口を「増やす」発想の前に、その地域の魅力を感じる「関心人口」を増やすことが必要である。その観点を持った上で、福島市のファンを増やす機会づくりを今後も継続していく。





参 考 資 料



- ふくしま未来学推進室会議
実施報告・議事要録
- 平成27年度「ふくしま未来学」に関する
報道一覧
- 平成27年度「ふくしま未来学」関係者一覧

平成27年度 ふくしま未来学推進室会議 実施報告

「ふくしま未来学」の事業を推進するための企画立案及び決定は、ふくしま未来学推進室会議で執り行う。平成27年度は、下記の日時に会議を実施した。

1	第26回	平成27年 4月24日(金) 15:30~17:00
2	第27回	平成27年 5月21日(木) 12:00~13:00
3	第28回	平成27年 6月25日(木) 12:00~13:00
4	第29回	平成27年 7月31日(金) 15:30~17:00
5	第30回	平成27年10月 8日(木) 9:00~10:00
6	第31回	平成27年11月27日(金) 10:30~11:30
7	第32回	平成27年 1月14日(月) 9:00~10:00
8	第33回	平成28年 2月18日(木) 13:00~14:00
9	第34回	平成28年 3月17日(木) 10:00~11:00

平成27年度

第26回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年4月24日（金）15：30～17：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、功刀俊洋副室長、中村信一事務局長、丹波史紀実施責任者、
（人）松下行則推進室委員、（行）菊地芳朗推進室委員、（経）遠藤明子推進室委員、
今井賢司教務課長、牧野友紀地域コーディネーター、北村育美地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. 平成27年度の年度計画について

年度計画について承認された。

2. 連携自治体担当者会議について

COC事業の趣旨の理解及びさらなる協働推進を図るため、12連携自治体の担当者と意見交換等を行う「第1回連携自治体担当者会議」を5月11日（月）に実施することが決定した。

【報 告 事 項】

1. 推進室委員について

2. 平成27年度「地（知）の拠点整備事業」の交付内定について

3. COC事務局の任務・業務内容について

4. 平成26年度学外評価委員会の実施報告について
3月26日（水）に実施をした。

5. 新入生ガイダンスでのCOC説明実施報告について

各学類のガイダンスにおいてCOCの説明を行った。

6. 「むらの大学」説明会・ガイダンスの実施報告について

学生主体で「むらの大学」説明会を行った。「むらの大学」のガイダンスをふまえ、履修登録者は56名となった。

7. 地域志向教育研究経費説明会の実施報告について

3回の説明会終了後、申請書を取りまとめ、5月に審査委員会を開き、6月に採択通知を行う。

8. コア科目担当者会議の実施について

4月24日（金）に、「第1回コア科目担当者会議」を開催する。

9. 「平成26年度大学改革推進等補助金実績報告書」の文部科学省への提出について

10. 地（知）の拠点整備事業アンケートについて

学生対象アンケートについては紙媒体で行う。コア科目担当者向けのアンケートも実施する。

11. 「みらいバス」について

今年度から月1回程度、福島県内各地を訪れる1 Dayスタディツアーとして「みらいバス」を展開する。対象は学生、教職員。

12. COC+への応募について

平成27年度

第27回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年5月21日（木）12：00～13：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、功刀俊洋副室長、丹波史紀実施責任者、（人）松下行則推進室委員、
（行）菊地芳朗推進室委員、（経）遠藤明子推進室委員、（理）長橋良隆推進室委員、今井賢司教務課長、
牧野友紀地域コーディネーター、北村育美地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. 地域志向教育研究経費応募状況と審査会について
申請額合計は予算内に収まっていることを報告した。地域志向教育研究経費採択審査会については、5月26日（水）に開催することが決定した。

【報 告 事 項】

1. 文部科学省への実績報告書の提出について
4月30日（木）に文部科学省へ提出をした。
2. コア科目担当者会議について
4月24日（金）に「第1回コア科目担当者会議」を開催し、各コア科目の担当者から授業内容について共有し、意見交換を行った。
3. 地（知）の拠点整備事業アンケートについて
5月末に文部科学省へアンケートを提出する。
4. 第1回みらいバスの実施と第2回目以降の運行について
第1回みらいバスは、4月29日（水）に川内村諏訪神社春季例大祭に参加した。第2回みらいバスは葛尾村の運動会に参加する。
5. 「むらの大学」スタディツアーについて
5月9日（土）に「むらの大学」における川内村スタディツアーを行った。南相馬市におけるスタディツアーは、5月30日（土）に実施する。
6. 連携自治体訪問・連携自治体担当者会議について
実施責任者と地域コーディネーターで連携自治体を訪問した。5月11日（月）には「第1回連携自治体担当者会議」を開催し、「ふくしま未来学」の事業内容と趣旨説明、意見交換を行った。
7. ニュースレター川内村特集号について
ニュースレター川内村特別号を発行した。川内村役場からの要望で、川内村の6月の広報誌に同封される。

平成27年度

第28回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年 6月25日（木） 12：00～13：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、功刀俊洋副室長、中村信一事務局長、丹波史紀実施責任者、
（人）松下行則推進室委員、（行）菊地芳朗推進室委員、今井賢司教務課長、
北村育美地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. オープンキャンパスへの出展について

8月9日（日）のオープンキャンパスにおける、パネル展示とシンポジウムの企画について、承認された。

2. COC出前講座について

「ふくしま未来出前講座－いのちとくらしデザイン塾－」を9月から5回の連続講座として開催することが決定した。対象者はコミュニティ交流員、生活支援相談員、復興支援員。

【報 告 事 項】

1. 平成27年度交付申請書の提出について

2. 平成26年度事業実績報告書の再提出について
実績報告書を修正し、文部科学省へ提出した。

3. 地（知）の拠点整備事業アンケート結果について
地（知）の拠点整備事業アンケートを提出した。

4. 平成27年度地域志向教育研究経費について

5月26日（水）に地域志向教育研究経費採択審査会を実施した。

5. 「むらの大学」における南相馬市スタディツアーの実施について

5月30日（土）に、南相馬市の現状把握、課題の発見のためのスタディツアーを実施した。

6. 「みらいバス」について

第2回みらいバスは、葛尾村の村民運動会に参加した。第3回みらいバスは、7月4日（土）に実施をする。

7. 地域再生の先進事例調査（岩手・宮城）について

他大学のCOC事業や被災地における企業の取り組み状況のヒアリングを行う目的で、岩手・宮城への先進事例調査を実施する。

8. 地域コーディネーターの募集について

9. その他

- 「むらの大学」授業外活動「川内村合同運動会」参加について
- 「ずっと福島市応援プロジェクト」への協力について
- ニュースレター6月号について

平成27年度

第29回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年7月31日（金）15：30～17：00

場 所：行政政策学類棟 3階 中会議室

出席者：神子博昭室長、切刀俊洋副室長、丹波史紀実施責任者、（人）松下行則推進室委員、
（経）遠藤明子推進室委員、（理）長橋良隆推進室委員、今井賢司教務課長、北村育美地域コーディネーター、
高橋あゆみ地域コーディネーター、新田真由子地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. モデル選択科目の追加について

「現代アートマネジメント」をモデル選択科目に追加することが承認され、今年度後期から開講することが決定した。

2. オープンキャンパスへの出展について

8月9日（日）に実施をするパネル展示及びシンポジウム、クイズラリーの運営方法が決定した。

【報 告 事 項】

1. 7月以降のふくしま未来学推進室の体制について

2. 学長裁量経費の採択について

3. 平成27年度交付申請書の再提出について

平成27年度交付申請書の資金繰り表の一部に記入誤りがあり、修正し再提出をした。

4. 「みらいバス」について

7月4日（土）に第3回みらいバスとして、二本松市東和地区を訪問した。7月25日（土）には第4回みらいバスとして、南相馬市鹿島区を訪問した。

5. COC出前講座について

共催、講演依頼については現在進行中である。

6. COC公開授業について

後期コア科目として「（総）ふくしま未来学入門」を新規開講し、一般にも開いた「公開授業」とする。

7. 地域再生の先進事例調査（宮城・岩手）について

6月29日（月）、30日（火）に宮城県石巻市雄勝町にある廃校を利用した体験型複合施設「MORIUMIUS」を訪問した。7月6日（月）に岩手県にある三陸鉄道株式会社と岩手大学を訪問した。

8. 事務局の業務改善について

企業等の業務改善において専門性を持つ富士通株式会社と協働により業務改善を行う。

9. 広野町国際フォーラム・広野町スタディツアーについて

広野町から、広野町国際フォーラムへの参加依頼を受け、参加と実施方法について検討する。

10. その他

- 「むらの大学」オプション 川内村高田島フェスタ参加について
- 「ずっと福島市応援プロジェクト」について
- コア科目担当者会議について
- 総合教育研究センター主催教育FDについて

平成27年度

第30回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年10月8日（木）9：00～10：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、功刀俊洋副室長、中村信一事務局長、丹波史紀実施責任者、

（人）松下行則推進室委員、（行）菊地芳朗推進室委員、（理）長橋良隆推進室委員、今井賢司教務課長、

北村育美地域コーディネーター、高橋あゆみ地域コーディネーター、新田真由子地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. 平成27年度教育FDについて

コア科目・モデル選択科目の担当教員を対象として、アクティブラーニングについての事例報告及び意見交換を行う教育FDを実施することが決定した。

2. 連携自治体担当者会議について

「第2回連携自治体担当者会議」開催をすることが決定した。

【報 告 事 項】

1. オープンキャンパスへの出展について

8月9日（日）のオープンキャンパスで、高校生向けシンポジウム「福島学×ふくしま未来学」とパネル展を行い、約300名が来場した。

2. 「むらの大学」フィールドワークについて

「むらの大学」にて2週間のフィールドワークを実施し、南相馬市フィールドワークは22名が参加、川内村フィールドワークには34名が参加した。

3. 広野町スタディツアー・広野町国際フォーラムに

ついて

9月19日（土）に広野町主催の「広野町国際フォーラム」に参加し、「むらの大学」の2週間の実習で学んだことなどを国際フォーラムで報告した。

4. コア科目担当者会議について

9月29日（火）に授業内容の向上と情報共有を目的に「第2回コア科目担当者会議」を行った。

5. 「みらいバス」について

第5回みらいバスは、10月12日（月・祝）に金山町を訪問し、エゴマ収穫体験を行う。

6. COC公開授業について

「ふくしま未来学入門」における公開授業で、一般から受講者を募集し、12名から応募があった。

7. COC出前講座について

出前講座が今月から開始した。対象はコミュニティ交流員・生活支援相談員・復興支援員等。参加者は現時点で30名程が参加する。

8. 「ずっと福島市応援プロジェクト」について

福島市から地方創生に関わる事業としてCOCに協力要請があった。若者の地元定着と地域の魅力を再発見する趣旨で、協力する。

平成27年度

第31回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成27年11月27日（金）10：30～11：30

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、切刀俊洋副室長、丹波史紀実施責任者、(人)松下行則推進室委員、(行)菊地芳朗推進室委員、
(経済)遠藤明子推進室委員、(理)長橋良隆推進室委員、今井賢司教務課長、北村育美地域コーディネーター、
高橋あゆみ地域コーディネーター、新田真由子地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. 平成28年度自己デザイン領域科目について
キャリアモデル学習のコア科目化については、今後検討をすすめることとなった。
2. 平成28年度のモデル選択科目について
来年度のモデル選択科目の追加・削除の選定について、各学類で確認し、次回報告をする。

【報 告 事 項】

1. COC予算執行状況について
予定額に対して、概ね良好である。
2. 平成27年度地域志向教育研究経費執行状況について
3. 平成27年度教育FDの実施報告について
11月25日（水）にアクティブラーニングについて、他大学の事例紹介や意見交換を行った。
4. 「むらの大学」現地報告会について
12月5日（土）に南相馬市で、12月13日（日）に南相馬市で「むらの大学」の現地報告会を実施する。
5. 「みらいバス」について
10月12日（月・祝）に第5回みらいバスとして、金山町を訪れ、超高齢化社会の実態を学んだ。次回は双葉郡ツアーを1泊2日で実施する予定である。
6. 「ふくしま未来学入門（COC公開授業）」の進捗状況について
学生と一般合わせて毎回約300人程度が受講している。次年度も続けていく予定である。
7. COC出前講座の進捗状況について
コミュニティ交流員・生活支援相談員・復興支援員等、復興に関わる人達を対象に、横の交流や情報共有を行っている。来年度も継続して欲しいとの要望がある。

平成27年度

第32回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成28年1月14日（木）9：00～10：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、切刀俊洋副室長、中村信一事務局長、丹波史紀実施責任者、（人）松下行則推進室委員、
（行）菊地芳朗推進室委員、（理）長橋良隆推進室委員、今井賢司教務課長、北村育美地域コーディネーター、
高橋あゆみ地域コーディネーター、新田真由子地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. COC指定科目について
COC指定科目として、「教育と文化による地域支援モデル」の中に「未来創造教育論」が新規科目として追加、「地域経済活性化モデル」に既存科目「都市経済学」「環境経済学」「特別演習Japan study program IV」の指定が承認された。
2. 自己デザイン領域科目について
キャリアモデル学習をコア科目にするかどうか、各学類で協議する。
3. コア科目のシラバスにおけるコンピテンシー記載について
コア科目担当教員に各授業で当てはまるコンピテンシーを選び、COC事務局に提出することが決定した。
4. 平成28年度「むらの大学」について
通年の「むらの大学」を前期と後期に分け、「むらの大学Ⅰ～Ⅳ」とし段階的に履修ができるように改編することが承認された。
5. 平成28年度COC公開授業における授業の追加について
現時点では1科目公開（「ふくしま未来学入門」）をしている。平成28年度はコア科目の公開授業数を増やす方向で教員に呼びかけることが決定した。

【報 告 事 項】

1. COC予算執行状況（第3四半期）について
COC予算執行状況（第3四半期）については概ね、計画通り執行している。
2. 平成27年度地域志向教育研究経費執行状況（第3四半期）について
3. 連携自治体担当者会議について
2月5日（金）に「第2回連携自治体担当者会議」を実施する。
4. 「むらの大学」現地報告会について
南相馬市では12月5日（土）、川内村では12月13日（日）に現地報告会を実施した。今回は住民の方々も参加できるワークショップ形式で行った。
5. 「みらいバス」について
第6回みらいバスは、1月23日（土）～24日（日）に県沿岸部（原発20km圏内地域）を1泊2日でめぐる。
6. COC出前講座の実施報告について
参加者の満足度の高い講座となった。来年度も開催希望がある。
7. 平成28年度「ふくしま未来学入門」について
毎回受講生が多い授業となった。来年度は地元で活動しているの方々を中心に講師をお願いする。
8. その他
 - 自己評価報告書、学内評価委員会、学外評価委員について
 - 地域志向教育研究経費成果報告会について
 - 経済経営学類の教養演習におけるアクティブラーニングの実施に向けた提案について

平成27年度

第33回ふくしま未来学推進室会議 議事要録

日 時：平成28年2月18日（木）13：00～14：00

場 所：行政政策学類棟 2階 大会議室

出席者：神子博昭室長、功刀俊洋副室長、丹波史紀実施責任者、（人）松下行則推進室委員、
（行）菊地芳朗推進室委員、（経）遠藤明子推進室委員、今井賢司教務課長、
北村育美地域コーディネーター、高橋あゆみ地域コーディネーター、新田真由子地域コーディネーター

【審 議 事 項】

1. 自己デザイン領域科目「キャリアモデル学習」について
行政政策学類を除き、各学類の「キャリアモデル学習」をコア科目とすることが決定した。行政政策学類では継続審議とする。
2. 平成28年度学習案内について
追加科目を掲載するほかは昨年度と変更のない学習案内とすることが承認された。
3. 平成27年度自己評価・学内評価・学外評価について
自己評価報告書をもとに学内評価委員会を3月3日（木）に、学外評価委員会を3月17日（木）に実施することが承認された。
4. 平成28年度の事業内容とスケジュール（案）について

【報 告 事 項】

1. 平成27年度地域志向教育研究経費成果報告会について
3月24日（木）に地域志向教育研究経費成果報告会を開催する。学外で開催し、神戸大学名誉教授の室崎益輝氏を基調講演の講師として呼び出す。

2. 連携自治体担当者会議実施報告について

2月5日（金）に連携自治体担当者会議を開催し、各自治体より意見・要望をいただいた。

3. 「みらいバス」について

第6回みらいバスとして、1月23日（土）～24日（日）に浪江町・富岡町・楡葉町を訪れ、被災地の現状と歩みを学んだ。

また、第7回みらいバスとして、3月5日（土）に広野町を訪れ、「ひろの防災緑地植樹祭」に参加をする。

4. 「ふくしま未来学入門」実施報告について

第9回～第13回の「ふくしま未来学入門」においても、出席学生が多く、学びの多い講義となった。

5. 平成28年度COC公開授業について

平成28年度は、現在公開授業としている「ふくしま未来学入門」のほか、コア科目のうち4科目を追加し、計5科目を公開授業とする。

6. 平成28年度新入生ガイダンスにおける「ふくしま未来学」の周知について

平成28年度の各学類における新入生ガイダンスにおいて、「ふくしま未来学」について概要説明を行う。また、学生有志による「むらの大学」の説明会も開催する。

7. その他

- 経済経営学類平成28年度新入生学外研修について

平成27年度「ふくしま未来学」に関する報道一覧

報道日	報道機関	区分	タイトル
平成27年 4月30日	読売新聞	みらいバス	春の例大祭 福大生も参加
4月30日	福島民報新聞	みらいバス	福大生、被災地に学ぶ 初の「みらいバス」川内訪ねる
4月30日	福島民友新聞	みらいバス	五穀豊穡願い「三匹獅子」川内
5月10日	福島民報新聞	むらの大学 【川内村】	福大生、川内の課題探る
5月10日	福島民友新聞	むらの大学 【川内村】	福大生、川内で学習
5月13日	毎日新聞	むらの大学 【川内村】	再生と復興 担い手育成
5月14日	朝日新聞	むらの大学 【川内村】	人生かけた米作り 今年も
5月25日	福島民友新聞	むらの大学 【川内村】	川内小に声援響く
6月1日	福島民報新聞	むらの大学 【南相馬市】	福大生、再生に向け学ぶ
6月1日	福島民報新聞	みらいバス	青空の下で運動会 葛尾村民 絆強める
8月22日	福島民報新聞	むらの大学 【南相馬市】	南相馬、被災の現場体感
9月5日	福島民友新聞	むらの大学 【川内村】	川内に触れて学んで
9月22日	しんぶん赤旗	むらの大学 【川内村】	ふくしま未来学 学生たち2週間川内村民と交流
10月5日	福島民報新聞	むらの大学 【南相馬市】	福大生、小高で稲刈り手伝う
10月27日	福島民友新聞	ふくしま未来学 入門	坪倉医師が公開授業 生活安定、健康の近道
12月3日	福島民報新聞	むらの大学 【川内村】	5日南相馬、13日に川内で報告
12月7日	福島民報新聞	むらの大学 【南相馬市】	最前線から復興学ぶ
12月17日	福島民友新聞	むらの大学 【川内村】	村づくりで意見交換 福大生と川内村民
12月27日	朝日新聞	むらの大学 【川内村】	復興、福大生は考える

平成27年度 「ふくしま未来学」 関係者一覧

ふくしま未来学推進室

役職名	氏名	所属・役職名
室長	神子博昭	役員 理事・副学長(教育担当)
副室長	功刀俊洋	役員 理事・副学長(総務担当)
実施責任者	丹波史紀	行政政策学類 准教授
委員	松下行則	人間発達文化学類 教授
委員	菊地芳朗	行政政策学類 教授
委員	遠藤明子	経済経営学類 准教授
委員	長橋良隆	共生システム理工学類 教授
委員	北村育美	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
委員	高橋あゆみ	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
委員	新田真由子	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
委員	中村信一	役員 事務局長
委員	今井賢司	教務課 課長

ふくしま未来学推進室事務局

氏名	所属・役職名
高橋清典	教務課 副課長
菅野悟	教務課 主査
北村育美	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
高橋あゆみ	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
新田真由子	ふくしま未来学推進室事務局 地域コーディネーター
大平未来	ふくしま未来学推進室事務局 教務補佐員
中村祐子	ふくしま未来学推進室事務局 事務補佐員

ふくしま未来学 学内評価委員

所属・役職名	氏名
人間発達文化学類 教授 学類長	千葉養伍
行政政策学類 教授 学類長	久我和巳
経済経営学類 教授 学類長	眞田哲也
共生システム理工学類 教授 学類長	二見亮弘

ふくしま未来学 学外評価委員

所属・役職名	氏名
南相馬市 市長	桜井勝延
川内村 村長	遠藤雄幸
一般社団法人あすびと福島 代表理事	半谷栄寿
NPO法人ETIC. 理事・事業統括ディレクター	山内幸治
葛尾村教育委員会 教育長	猪狩省造
福島県企画調整部 部長	近藤貴幸

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成25年度採択）
— 原子力災害からの地域再生をめざす「ふくしま未来学」の展開 —

平成27年度 ふくしま未来学 事業報告書

発行日 平成28年3月
発行 福島大学ふくしま未来学(COC)推進室
〒960-1296 福島県福島市金谷川1
TEL：024-504-2850 FAX：024-504-2849
E-mail：miraigaku@adb.fukushima-u.ac.jp
<http://coc.net.fukushima-u.ac.jp/>

編集・印刷所 株式会社 クサカ印刷所
〒960-8132 福島県福島市東浜町7-35

